

---

# 傍観する救世主

代給品

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傍観する救世主

### 【Nコード】

N7416M

### 【作者名】

代給品

### 【あらすじ】

ひよんなことからグローランサーの能力をもらった主人公がいろいろな世界へ行く予定です。原作を知らない主人公なので、原作ブレイクになるかどうかはわかりません。筆のノリ次第、という事になるでしょう。申し訳ありませんが、掲載は不定期になります。基本的に気が向いた時しか投稿しないので。現在ゼロ魔世界です。いろいろとゼロ魔世界と合わない設定が出て、そういうものだと諦めてください。

## ブローグ

### ブローグ

高校受験真ただ中、クラスメイトが休み時間中も勉強している中、僕は教室の隅で本を読んでいた。

受験が余裕なほど成績がいいわけではない、というより高ランクの高校にいいこうなどと端から思っていなかったで、自宅から歩いて通える高校のレベルがそれほど高くも低くもなく、十分現在の学力で合格できる為、皆の様に高望みもせずそこに進学する事にしたのだ。

僕にとって勉強とは恥をかなければそれでいいだけの価値しかなかったし、運動に関してもそれは変わらない。

同級生達は、容姿や服装、小物のセンスなどにするさい人もいたが、そんな事にも全く興味はなかった。

服は清潔であればそれでいいし、自分の顔にも満足している。

別に二枚目というわけじゃない。

人に不快感を与えるような容姿ではなかったので、それで十分だと思っていたからだ。

身長160?、健康の為ある程度は運動もしているので、本の虫といっても肥満体でもなければ骨と皮ばかりというありさまでもない。どこにでもいるようなごく普通の少年だと、自分では思っている。

いつものように学校帰りに図書館に寄って本を読み、閉館時間になったので家に帰る。

日記を書いていたら、毎日同じ事しかかれないだろう、だけど僕自身は十分満足していた毎日。

そんな日常は、僕以外の誰か的意思によって突然終止符が打たれる

事になった。

## 第1話

### 第1話

図書館の帰り、歩きながら本を読んでいた僕は視界の端っこにある物を見つけた。

段ボールに入った真新しそうな本。

ちよつと路地に入ったところに置かれたそれは、これから起こる事へ死の誘惑であつたが、その時の僕には天使の微笑みにしか見えなかった。

一月三千円のお小遣いの身にとって、小さめの段ボールとはいえそれにぎつしり詰まった本の誘惑は、抗えるものではなかった。もつとも抗おうなどと思ひもしなかったが。

まず気になるのは、本の内容。

読んだ本ばかりだったら、興ざめもいいところだ。

パツと見真新しそうではあるが、中身の確認も必要だ。

大方誰かがいらなくて捨てたのだろうが、びりびりに破けていたり、汚されていたら拾う価値がない。

完結しているかどうかはそれほど問題ではないが、少なくとも上下巻本で下巻のみとか、連載中の漫画で中途半端な巻数（しかも一巻がない）というのも勘弁してもらいたい。

途中から見て面白かったので興味を覚える人もいるだろうが、僕は最初から見ないと気が済まない性質だから、途中からしかない本にはそれほど興味がわかないのだ。

ざつと確認してみると、そのあたりも問題なさそうだった。

これはいい拾い物をしたものである。

15冊ほどではあるが、どれも見た事のない本。  
巻数がつけられているのもあるが、一や上とあるので導入部に関する問題はない。

家に帰り食事や風呂、宿題などを済ませた僕は部屋に籠って早速本を読みだした。

何冊がある中から最初に選んだのは、グローランサーという本。  
確かゲームであった様な気がするがプレイした事はない。  
重要なのはその本だけは上下巻セットだったという事。

ゲームのノベライズなんてあまり見た事がなかったけどそれなりに  
楽しめる内容ではあった。

僕が普段読む本は時代小説や武？小説、歴史物が多かったので、こ  
ういった剣と魔法のファンタジー小説をあまり読んだ事がない分、  
変な先入観を持たずに読めたのだろう。

続いて読む本を選ぼうと取り上げた一冊。

ゼロの使い魔。

それがすべての始まりだった。

本を開いた瞬間僕の意識はブラックアウトした。

## 第2話

### 第2話

気がついたのは白い空間だった。

何もない空間。

自分が横になっている事は感覚的に判るが、何に横たわっているのかも判らない。

前後の状況がまったくつかめず、パニックに陥る事も出来ない思考停止状態。

多分頭が現状認識を拒否したのだろう。

僕は速やかに意識を失った。

次に気がついた時、僕はソファで横になっていた。

目の前には心配そうに見つめる白い服のおじいさん。

「おお、やっと目が覚めたか。」

おじいさんはそういうと僕が置かれている状況について説明を始めた。

いわく

おじいさんは神様。

僕が拾ったあの本は元々このおじいさんの物、正確に言つとおじいさんが孫から預かっている物だそうだ。

先日天界であつた地震の際に、保管場所に穴が開いたらしく、下界

に落ちたのを探していた。

誰かに読まれる前に取り戻そうとしたのだが、発見した時には既に僕が読んでしまっていた。

そしてここからが重要なのだが、この本と僕の間リンクがつながってしまつたらしく、このままでは孫に返す事が出来ない。

本とのリンクを断つには最後まで読むしかないのだが、生憎ここにある本はまだ完結していない為、次善の策として本の世界に僕を送り込み、僕に本の世界でエンディングを迎えてほしいとの事。

ただしここにある本はファンタジーな小説や漫画ばかりなので、このまま送りだすとおそらくあっけなく死んでしまふ。それでもリンクは切れるが、本に澱みが残ってしまう。

それを避ける為の処置が問題なのだが、幸いにして僕は既に完結した物を読んでいるので、その世界の力を付与できる事。

つまり、グローランサーの魔法やリングウェポンを使えるようになったという事らしい。

「そういうわけで君には本の世界に行ってもらふ事になる。」

「拒否権はないのですか？」

「すまぬが、それは認められんのだ。何、心配するな、すべてが終わるまで君の世界の時間を止めておくし、元に戻った時に君の年齢が加算されるわけでもない。君にとつては現実世界に戻るまでの夢のようなものだ。もっとも、君が訪れる世界での経験も君にとつては現実のものなので、むやみやたらと悪事を働く事は推奨しない。君とて周りの人間から命をつけ狙われる生き方なんかしたくはないだろう？」

「そうですね。ご忠告感謝します。」

本の世界に行く事は避けられない事らしい。  
が、問題はまだある。

一つには僕がその物語を全く知らない事。

言葉や一般常識が判らなければ、ついてすぐ路頭に迷う。

二つには貰った能力について。

アイテム関係はほぼ絶望だし、モンスターを倒しても最初のリングがないんじゃない？リングウェポンすら入手できない。まずリングと防具、魔石がなければ例え力があっても発揮する事すらできない。

何よりもまず、これからいく世界にグローランサー世界のモンスターがいるとは限らないのである。

これでは何もできそうにない。

「その世界の知識が全くないのでどうしたらいいのかが判らないのですが。原作を壊す事になっても問題はないのでしょうか？」

「その点については気にしなくてもいい。これから始まるのは君だけの物語。この本の作者は他にいるし、その人が書いた世界と同じなのはスタートラインだけ。並行世界の様なものと考えてくれればいい。」

「僕の力に関してはどうなるのでしょうか？最初にリングがなければ何もできません。魔法や特技、スキルの習得すらできないのです。」

「ふむ、それならば問題はない。ここで君に装備を渡しておけばよからう。そうじゃな、どんなリングがいい？」

「出来るだけいいリングをお願いします。どんな危険があるかも判らないのですから、出来るだけ準備を整えておかなければ。」

「そうになると、幻竜のヴィズリルになるな。制御力はどうする？」

「そちらも最高で。できれば魔石の色に関する制限を取り払ってください。」

「9・9・9でいいかな？魔石の色にかかわらず成長速度は100%に設定する。ただしこの効果は他のリングには受け継がれぬので気をつける様に。」

「モンスターから魔石の入手は出来るのでしょうか？」

「それは可能だ。」

「アイテムや防具、本などは？」

「それは無理があるな。元々あちらの世界に存在しないのだから。」

「祝福の鐘というアイテムがあつたと思うのですが、それと同じ効果を持つ魔石はありますか？」

「祝福の鐘か？ちよつと待ってくれ……ふむ、修験者の奇跡という物があるな。」

「それでは後防具と、魔石数個、収納用のリングをください。」

「どのような物が欲しい？」

「そうですね、では防具はファイナルガード。魔石ですが能力増強に役に立つ物を幾つかいただけませんか？収納リングは普通の物で構いませんが、壊れない物をお願いします。」

「わかった。と、それよりもまずはリングウェポンを作らねばな。

君が使用できるかどうかの確認をしないといけない。」

そう言うのと神様は奥に引っ込んでしまった。

やる事もない僕は今までの状況確認をする。

何か聞き忘れた事はなかっただろうか。

リングと防具、魔石に関しては問題ないだろう。

あとは……そうだ、アイテム。

流石に回復アイテムが一つもないのは辛い。

「これが君のリングウェポン。幻神のウィズリル。幻竜のウィズリルから制御力に関連する制限を取り払ったものだよ。一個しかないし、複製も出来ないから無くさないように。腕輪として常時身につけておく事。それじゃリングを嵌めて、武器を想像して？」

「はい。どんな武器がいいのでしょうか？」

「別にどんな武器でも構わないよ。君が欲しい物を想像すればいい。」

武器。

平和な世界で育った僕には縁のない物。

日本刀？

使った事なんてないし、持った事もないが、恐らく僕には扱えないだろう。

本で読んだ限り、扱うのにはかなりの修練が必要だ。

平和な世界ならともかくファンタジーの世界でそんな暇があるか判らない。

槍や斧、両手剣、弓、鎌、ブーメラン。

名前しか知らない。

扱い方なんか判る筈もない。

ヌンチャク、九節鞭、流星錘、三節棍、鉄鞭。

どれもこれも扱いが難しすぎる。

敵を倒す前に自分がボロボロになりそうだ。

あとは……棍？

いいかもしれない。

血を見なくて済みそうだし、それほど扱いが難しい物でもない。

まあ、殺傷力はともかく初心者にはうってつけだろう。

棍と聞いて最初に思い浮かぶのって言ったら、如意棒かな。

うん、イメージしやすい。

そうして眼を瞑った僕がイメージしたのは赤い棒。

棒の先端部が金色の背丈ほどの棒。

手に重さを感じ、目をあけるとそこには想像通りの棍があった。

「成功の様な。ではこれが収納リングだ。君の欲しがっていた物はすべて中に入っている。受け取りたまえ。」

「あ、ちよつと待つてください。回復アイテムを幾つか貰えないでしょうか？いきなり怪我をする事も考えられるので、保険として持っておきたいのですが。いつになったら回復魔法が使えるか判りませんし。」

「それもそうか、では状態回復と、体力回復、精神力回復関係の物を幾つか入れておこう。早めに回復魔法を使えるようになる事だな、個数には限りがあるのだから。」

「ありがとうございます。これから行く世界の知識はどうなるのでしょうか？言葉や一般常識が判らないと困るのですが。」

「それは問題ない。向こうの世界に行く時に自動的に頭に送り込む事になっている。」

「向こうの世界に魔法はありますか？」

「そうだな、これから行く世界だが、君が倒れる前に触っていた本にしよう。この世界は魔法がある。一応君にも魔法を使用できる素質は与えておくが、あくまで素質であって使えるかどうかは君の努力次第だ。ただし、向こうの世界の魔法でモンスターを倒してもリングなどは入手できないからな。あとはある程度の武術の素質だな見たところ君は武器の扱い方など知らないだろう。リングウェポンで武器があっても、扱えないのでは意味がないからね。」

「そうですね、努力する事にします。そう言えば、敵を倒してできたリングはあの世界の人間にも使えるのですか？」

「基本的には使えない。あの世界で作られたリングは君のリングウェポンによって作られた物。君が許可しない限り、他人には扱えない。また、君が許可をした物で敵を倒してもリングウェポンは作れない。魔石のランクも下がるし、スキルなどの習得効率もかなり落ちる。元々あの世界の物でない物を盛り込むのだからその辺りには

限界というものがある。むやみに広めては世界が崩壊してしまうからな。」

「安心しました。最後にこの世界にはどのような形でいくのでしょうか？」

「すまないが、転生というわけにはいかない。あまり干渉しては世界観が壊れるからな。主人公達と同年代で五歳前後の姿になると思う。両親などをつけてやりたいのだが、それも難しい。孤児という事になる筈だ。あちらの世界で魔法を使えるのは貴族だけなので、君の頑張り次第ではそれほど困った状況にはならないと思う。」

「わかりました、それではお願いします。」

「それでは門を開けるのでくぐってください。」

そう言っていると神様は古めかしい大きな門を召喚した。

「それでは行つてきます。」

### 第3話

#### 第3話

門を通っている最中頭の中には神様の言ったとおり色々な情報が流れてきた。

ブリミルと呼ばれる6000年前の人物。ブリミル教と呼ばれる死者に対する信仰。ブリミル教の教皇、そしてブリミルの血を引く王家。亜人と呼ばれる先住魔法を使うエルフや翼人、竜や天馬などの僕の世界では幻想の中だけの存在だった生き物達。魔法を使える貴族と使えない平民。各国の情報etc.

魔法を使える為科学技術の発展は著しく遅れており、地球で言うならおそらく中世ヨーロッパを想像すると判りやすいだろう。

そんな事を考えながら歩いていたらいつの間にか門を抜けていたらしい。

気がつくとも高い丘の上に立っていた。

遠くの方には町が見える。

身体は神様の言った通り五歳児ぐらいになっていた。多少の違和感はあるが、それはしょうがないだろう。

まず何よりも先にやる事は装備の確認と変更。

とりあえずリングに魔石を装着しなければならない。

収納リングから現在中にある魔石やアイテムの情報が流れてくる。

現在所有の防具、ファイナルガード。体のサイズに合わせてくれるようだが、生憎とこれを装備できるだけの力がないらしい。着て着れない事はないが亀の歩みになるだろう。これは予想外だった。

そう言えば防具を着るには必要な筋力が設定されていたっけ。なんで筋力なのかはよく分からないが。それほど重いわけでもないのにとりあえず今着ているのは、ごく普通のシャツとズボン。防御力なんて無きに等しいだろう。

魔石は、筋力成長促進×1 知力成長促進×1 瞬発力成長促進×1  
1 究極魔法奥義×1 究極スキル奥義×1 究極特技奥義×1  
マテリアルマスター×1 M2×1 友情の証×1

究極奥義系三種類が揃っているのは嬉しい。

魔法奥義があるなら、アイテムはあまり必要なかったか？

まあ、魔法の使えない状況がある事を考えたら、十分保険にはなるか。

特殊効果のある魔石はないからそちらの方は自力で揃えなきゃいけないけど。

少なくとも習得できないものはなさそうだ。

まあ、とりあえず成長促進系をつけておくか。

五歳児の体じゃありリングの効果があっても敵に襲われたらひとまわりもないからな。

とりあえずの目標は生き延びる事。

知らない人ばかりのこの世界で生き延びようとするなら相応の実力が必要になるだろうから、まずは生きていけるだけの力をつけよう。暫くは一人で生活し、体が出来てきたら町に行ってみるか。

この世界の魔法も習得しておきたい。

それより何より本が読みたい。

まあ、判っている限り印刷術の発展していないこの世界で本は貴重品だから、なかなかお目にかかる事はないだろうけど。

とりあえず現在地の調査。

何処にいるかも判らなくては流石に困る。

トリステインやガリア、ロマリアだったら早目の場所移動が必要だろう。

正直貴族至上主義のトリステイン、ジョゼフのいるガリア、プリミル狂いのロマリアはあまり近寄りたくない。

アルビオンは食事に問題があるけど、それなりに平和そうだし、ゲルマニアは貴族がそこまで幅を利かせてないからこの二国がいいんだが。

調査の為にはどうしても人と接触する必要がある。

だが、今の段階で街に行くのは正直厳しい。

最低でも自衛の手段だけは取れるようになっておかないと、貴族に会ったらあっさり殺されそうだ。

うん。調査はある程度おいてからでもいいか。

まずは今日の食料の確保。

五歳児の体でもリングで身体能力が底上げされているし、罾を作ればなんとかなる。

まあ、まだモンスター相手に戦えるほどではないけれど。

そう思った僕は、川の方に向かっていった。

いったん筋力成長促進を外し、代わりに究極魔法奥義をつける。

ウインドエッジで樹を適当に切って、槍を作成。

小型の投げるタイプの物だからあまり使い勝手は良くないけど、贅沢言ってもいられない。

槍を作ったら魔石を装着しなおす。

正直、魔法でやれば簡単だろうけどそれではいつまでたっても基礎能力が上がらない。

あとは河原にあった黒曜石を加工してナイフを作成。

さて、準備も整った事だし、初めての狩を始めますか。

## 第4話

### 第4話

一日かけて狩れた獲物は、ウサギみたいな動物一羽のみ。

これだけ長時間狩をしてこの結果には流石に意気消沈する。

罾も作りが雑だった為、かかったと思われる物はすべて壊れていた。調味料も何もないのが残念ではあるが、ウサギを捌いて丸焼きにする。

ウサギを食べた事はないが食べれる動物だとは判っている。

まあ、この世界のウサギがどうかは知らないのだが。

結論を言えばウサギの肉は美味しかったが、予想以上に肉の部分が少なかった。

神様に貰った力と知識にもいろいろ不便な点がある。

知識に関して言えば、ある程度の事は判るのだが、どのような実が食べられるとか毒があるとかは判らない。

まあ、神様も僕がいきなりサバイバル生活を送るとは思っていないかったんだろうが。

食事の時には魔石の究極スキル奥義をつけて状態異常無効化を発動した方がよさそうだ。

力に関して言えば、リングの底上げがあってもせいぜい以前と同程度の身体能力しかない。

まあ、身体能力の違いにそれほど困らないのはいい事ではあるが、元々の能力だつてそれほど高くはないのだから、この状況で敵に襲われるとかなり危険だ。

これからは出来るだけ身体能力を上げる訓練をしなければ。

武器の棍の扱い方も一応知識としてもってはいるが、実戦で使うレベルではない。

というより練習した事がないんだから使えるわけがない。

魔法やスキル、特技についてはある程度基礎体力がついてからでないと使えない。

今の状況で普通に成長なんて無理、絶対死ぬ。

この世界は平和とはほど遠い、平和な世界で普通の身体能力しか持っていないかった僕では到底太刀打ちできないだろう。

少なくともある程度モンスターと戦えるか、逃げる体力ができるまでは魔法に頼りつきりになるわけにはいかない。

一日動いて疲れた僕は、河原で焚火をしながら眠りについた。

## 第5話

### 第5話

目を覚ました僕は河原で水浴びをしながら棍を振り回す。

釣り糸がないから釣りはできないが、魚に中てる練習と思っての事だ。

考えてみれば昨日の狩ではリングウェポンを使わなかった。

モンスター相手ではなく、狩をしてリングや魔石が取れるかを確認したかった。

結果、魚は一匹も取れなかった。

まあそうだろう、いくらなんでもそんなに簡単にいくわけがない。

多少かすったのもあるが、僕の武器は刃のない棍。そのまま逃げられた。

この時ばかりは槍にした方が良かったかと思った。

とりあえず昨日はウサギ一羽獲れとのだ。

今日は棍で得物を獲る事にチャレンジしてみよう。

丈夫そうな蔦を用意し、樹に登って獲物を待つ。

樹の幹に蔦をくくりつけ、もう一方を腰に巻きつける。

得物が下を通る頃合いを見計らって樹から飛び降り、棍で脳天を一撃するつもりだ。

流石に着地失敗したらシャレにならないので蔦は命綱の代わりである。

気配を殺すなんてできないので、できるだけ体を動かさずにじっと待つ。

この樹の下には獣道があるので、それなりに可能性はあると思う。

というより他の方法が思いつかなかった。

どう考えても足で勝てる筈がない。

昨日のウサギだって、たまたま投げた石に中らなかつたら獲れなかっただろう。

罨では棍が使えない。今は少しでも棍に慣れておきたいし、魔石の確認もしたいからこれは却下。

落とし穴にしびれ薬や眠り薬を仕込むというのも考えたが、肝心の薬がない。

町に行けばあるだろうが、今の状態で街には行きたくない。自分で選択できる範囲を狭めているから仕方がないが、僕に選択肢の余地はなかった。

朝から樹の上で過ごし半日、そろそろ疲れてきた。

獲物の姿はなかなかない。

いや、一頭通ったのだが、体長3mはありそうな熊。

いくら落下のスピードを利用して元々五歳児の体重しかない。

一撃で殺せる自信がなかったので見逃したのだ。

何しろ失敗すれば宙ぶらりんな格好の的になるのだから。

一撃で殺せなければ、あとがないのだ。

天使の秘蹟があれば、とも思いが無いから仕方がない。

そういうわけで僕はいまだに樹の上で今か今かと獲物を待っている。あれこれ余計な事ばかり考えて諦めそうになる気持ちを必死に繋ぎとめながら。

獲物の姿が見えたのはそろそろ空が赤くなってきた頃。鹿のような動物が獣道をこちらに向かって進んできた。

時間的に考えてこれが今日最後のチャンスだろう。

これ以上暗くなると獲物の姿が見えなくなる。

逸る心を抑えてじっとタイミングを計る。

狙いは頭。

頭は砕けなくとも昏倒させる事は可能な筈。

目を閉じて一つ大きく息を吸う。

枝を揺らさないように気をつけて飛び降りる。

殺気にきづいたのか走りだそうとするがもう遅い。

棍は狙い過たず吸い込まれるように脳天を打ち砕いた。

あとに残ったのは物言わぬ鹿の骸と魔石が一つ。

狩でも魔石が取れる事を確認できた。

河原まで鹿を運ぶのはかなり骨が折れた。

鹿を捌きながら気になっていた事を考える。

あの時神様は、すべてが終わったらと言っていた。

それはつまり、この世界が終っても他に行く世界があるという事だ。こちらの世界の経験を持ちこめるのかは判らない。

が、今持っている力は読んだ本の力。

この世界が終われば、最初の本を読んだ事になる。

ならば、次の世界でも使える可能性はある。

次に行く世界がどんな世界か判らないが、無駄という事にはならないだろう。

数十？のシカの肉を一度の食事で食べ切れるわけもなく、残った肉は細切れにして焚火で乾燥させて干し肉にする。  
少なくとも10日は食事に困る事はないだろう。

出来上がった干し肉を収納リングにしまつと、鹿を倒した時に出てきた魔石について考える。

手に入ったのはLV1 再生能力+1の魔石。  
一定時間ごとに体力が回復する魔石だ。

これで狩をしながらでも魔石集めは行える事が確認できた。  
もつとも狩の獲物では、おそらく高ランクの魔石は期待できないだろう。

それでもまずは集めてみよう。  
無駄になる事はないだろうし、特技などは覚えられないとはいえ特殊効果があるのだから損になる事はない筈だ。  
それにひよつとしたら売れるかもしれない。

三つ揃えれば病気や怪我にはかなりの効果が期待できるだろう。

LV1なら大した心配も必要ない。  
リングは注意も必要だが、このリングが武器になる事を教えなければおそらく問題はない。

元々誰にでも使える物ではないし、使えたとしても何も手に入れる事は出来ない。

闘わなければいけなくなつても、多少体力の高い敵という事で済む筈。

まあ、そんな人に売るつもりはないが。

先走り過ぎた。

先程鹿を倒してから、体が軽い。  
レベルアップの効果だろう。

おそらく魔石が効果を発揮したのだろうが、ステータス画面度を見れるわけでもないの、実際の上昇量は確認できない。

レベルが上がることに能力は上がるだろうが、元々のレベル自体を知らないし、どれだけの経験が必要なのかも判らない。

まあ、最初のうちはそれなりの速さで上がっていくだろう、狩だけでは限界も低いだろうが。

明日からは棍の修行をメインにして、獲物があつたら狩るぐらいでいいだろう。

## 第6話

### 第6話

それからは棍の修行を倒れるまでやり、魔石を付け替えて魔法で回復させる日々が続いた。

体力もついてきたし、食料もそれほど苦労しないで獲れるようになった僕は、場所を移動する事にした。

今収納リングの中には、LV1魔石全種類×9、リング制御力1-1-1の物が10個、数百？に及ぶであろう干し肉、生肉（ある程度備蓄ができた後に試してみたが、一週間入れても腐らなかった。）が増えた。

いらないリングはどうしようかと思ったが、僕がいらないと判断した物はすべて消えた。

正直これは予想外だったが、同時に助かった。

リングには魔石をつけて魔法などを習得する効果、武器になる効果、そして体力などを上げる効果があるからだ。

このうち問題になるのは三つ目の効果。

前の二つは対応策があるが、三つ目の効果はリングをはめれば誰にでも効果が出るのだ。

狩の時に出た物だからそれほど強力ではないとはいえ、今後の事を考えるとここで確認できてよかった。

最初の内はそれほどかからず能力が上がっていたが、ここ最近はやがて能力が上がらない。

そう気づいてからは魔法や特技、スキルの習得の為魔石を付け替え

た。

成長促進系をつけていたからか、身体能力増幅系が一番高い。次に高いのは回復魔法、防御魔法で、残りはほぼ同じ程度の習得率だ。

それでも一応すべてLV1まで上がっているの、これからは成長促進系だけ付けていても使えるし、わずかずつではあるが習得率も上がる。

ちなみに今着ている服は、この世界に来た時の服ではない。獲物の皮をなめして作った物だ。

人前に出る必要もないので、野生児みたいな格好になっているが、やはり町に行く時にはボロボロの衣服を纏うより、ちゃんとした服を着ていた方が人目は引きにくいだろうし、余計なトラブルに巻き込まれる事もないだろう。

そう思つて最初に来ていた服は収納ボックスにしまっておいたのだ。代わりに身にまとったのは、最初に棍で仕留めた鹿の毛皮。

何処の野人だと言いたくなる姿だが、誰に見られるわけでもないのだから気にもならない。

一年近く伸びっぱなしの髪は後ろでひとまとめにした。

そう言えばこの世界での姿は元の世界の姿とは少し違った。

それほど変化はないのだが西洋人風の顔立ちと金髪、青い目。

別にハンサムになったわけでもブ男になったわけでもない。

身体は無駄なく引き締まっているが、これは一年間の修行の成果だろう。

身長もそれなりに伸びていたが、最初に来ていた服に余裕があったので着る事ができた。

河原で汗を流していたから、薄汚れてもいない。

これでやっと町に行く事ができる。

まずここがどこか調べないとな。

あ、この世界での名前まだ決めてない。

## 第7話

### 第7話

僕の名前は小橋 啓太。

こちらでの名前はケイン・ブリッグス。

三秒で決めたにしてはそれなりにいい名前だと思う。

元の名前を違和感があまり無い様に西洋風に変えたただけけど。

平民には姓はないが、貴族にはある。

これから魔法を覚えたいので、一応姓は考えておいた。

本当にこんな家名があったかは知らないが。

普段名乗る時はケイ。

これは僕の愛称でもあったから使いやすい。

町に行った時に怪しまれないように革でできた袋に毛皮や肉を入れておく。

リングや魔石はそうそう売れる物じゃないと思うし、マジックアイテム扱いになるだろうから値段の付け方がよく判らない。

それよりも六歳児が売りに行ったらかなり怪しいだろう。

没落貴族で家宝のマジックアイテムという事にするつもりだが、奪われる可能性は低くはないと思う。

売るにしてもこちらの魔法を覚えて、身体もある程度大きくなってからだ。

できればそれまでにある程度の後ろ盾はつけたい。

まずは町に行って肉と皮を売る、それから情報収集。  
そして魔法を覚えてくれる人を探す。

貴族は魔法を使えるが、魔法を使える人がすべて貴族ではない。傭兵や冒険者、あるいは貴族に仕える人の中にも魔法を使える人がいる。

元貴族や何代か前まで貴族だった人、貴族と平民の間にできた子供。そういう人達なら魔法を使える。

条件はたぶん貴族の血を引いているか。

6000年も続く社会だから、遡れば大体の人は貴族の血を引いていると思うが、使えない人が多いのはやはり血が薄れているせいなのだろう。

知識の中に詳しい条件は入っていなかったし、魔法にしてもある程度の知識しかなかった。

杖との契約、コモンマジック、四系統と失われた虚無。

このうち引つかかるのは契約に関する部分である。

杖といってもその形状は様々。

指揮棒のような杖や、背丈を超える大きな杖、殆ど剣と変わらない杖もある。

材質だって別に規定はない。

簡単に折れそうな木でできた物、殴り合いに使えるそうな太さの鉄、銅や銀、金製で宝石が嵌め込まれている物まである。

それらに共通するのはただ一点、細長い物、というだけである。

僕のリングウェポンは棍、この条件には当てはまる。

棍として出している状態で契約できるのではないかと思ったのだ。

結果的に成功した。

かかった時間は一カ月。

流石に知識だけでは細かいところまでは判らなかったので手間取ったが、とにかく棍との契約を結ぶ事に成功した、と思う。

杖の契約ができたのはいいが、肝心の呪文が判らない。  
いや、魔法の名前は判るのだが、どのように発動させるのがさっぱりなのだ。

こちらの世界の魔法が魔力を使うのか精神力を使うのかも判らなければ、それをどのように運用するのも判らない。

ちなみに棍との契約の時には、手に持った棍に魔力を通しながらひたすら祈っていた。

何が原因で契約成功したのか、さっぱりわからない。

というよりもこれで契約成功したかすら、今一つ不安だ。  
ただなんとなく杖になったな、と思ったただけだから。

ちなみに腕輪の状態でもその感覚は残っている。

契約成功しているのならこのままでも使える気はする。

もつともこのまま魔法を使うと先住魔法と間違われそうだから、人前では使えないが。

余計なごたごたを背負いたくはない。

そう言えばこの世界はファンタジー小説の世界。

当然の事ながら主人公がいるだろうし、いろいろな事件が起こるだろう。

魔法があるのだからそれを使った戦争なんかもあるかもしれない。

貴族がいるのだから宮廷闘争などもあるだろう。

魔法を使えない人との戦争になるのかもしれない。

血なまぐさい事は一切ない恋愛小説の可能性もある。

内容は知らないが、本の題名は『ゼロの使い魔』だった気がする。  
ゼロと虚無。意味としてはよく似ている

ひょっとしたら虚無の系統の魔法使いの事なのだろうか。

使い魔という事はその人物の使い魔が主役なのだろうか。

使い魔と聞いて頭に思い浮かんだのは『ドラゴン』だ。

この世界の竜は二種類いる。  
言葉を喋る竜と喋れない竜。

前者は確か韻竜といって高い知能を持ち、先住魔法を使う事が出来るらしい。

後者はそれほどの知能は持たないがそれでも他の獣と比べたら十分に賢い。

うーん。

流石に竜が主人公の小説は読んだ事がない。

それでも使い魔という事はメイジが主なのに変わりはない。

そのメイジが貴族なのかは判らないが、魔法を使えるという事だけは確かだ。

失われた系統というのが、実際どのような魔法かは貰った知識にはない。

地火風水の四系統は、呪文は判らないがどのような効果があるかは判る。

虚無の魔法については呪文どころか効果も判らない。

ただ判っているのは、6000年前ブリミルという人間が使った系統、それだけ。

考えると不安になってきた。

それでも、自力でできないのだから仕方がない。

覚悟を決めて、魔法を教えてください人を探すしかないのだ。

いざ、町へ。

## 第8話

### 第8話

外から見ていて思ったのだが、あまり大きな町ではない。人口200あるかも判らない小さな町。

どちらかという村と言った方が正しい様な気がする。それともかなり貧しい暮らしぶりだ。

売ろうと思っていた毛皮や肉の大部分をリングに戻す。ここでは情報収集だけにした方がよさそうだ。

「すいません、お肉を買い取ってくれる場所知りませんか？」

「すまないが、ここいらじゃ肉はぜいたく品さ。買い取れるようなお金はみんな持ってねえよ。」

町の入り口にいた中年の男性に声をかけるが、あっけなく目論見は瓦解してしまう。

事実この村には商店もない。

たまに旅商人が売りに来るが、その殆どは物々交換である。

「それじゃあ、このお肉と野菜を交換していただけないでしょうか？」

「ほー、なかなか上等な肉だね。よし、そこの籠にあるの好きに持つていきな。」

そう言って指差したのは、柵のところに残つか置いてある籠。

中に入っているのはジャガイモやニンジン。

痩せている土地なのかあまり育ちは良くないようだ。

肉を渡してから、怪しまれないように担いでいた袋に適当に詰め込む。

もつともそんなに大量の物が入るわけでもないが、ここ一年主食が肉だった事を考えれば、野菜というだけで嬉しい。

「ありがとうございます。」

「おう、坊主。それっぽっちでいいのか？ちつとも取ってないじゃないか。」

「これ以上は重くてちよつと持てないから……」

本当はまだまだ余裕で持てるし、リングを使えば多分まるごと持っていけるが。

六歳児の見た目で持てるだろう量だけというのはそんなに多くない。この人間でないのならそれは旅人。

六歳児が一人旅をするのには問題もあるだろうが、説明はいくらでもつけられる。

そして旅人が、重くて動けない荷物を抱えるわけがない。

結果袋に入れたのは五？あるかないかの野菜。

交換した肉も同じくらいの重さがある。

「そうか。じゃ、飯でも食ってきな。大したもんはねえが、肉の礼だ。」

「ありがとうございます。あの、ここからゲルマニアまではどれくらいかかりますか？」

「なんだい、坊主。ゲルマニアに行きたいのかい？ここはゲルマニアさ、もつとも東のはずれの小さな村だがね。」

おじさんと一緒に歩きながら聞きたい事を尋ねてみた。運がいい事にここはゲルマニアらしい。

「それじゃあ、ヴィンドボナまではどれくらいかかりますか？」

「ん、坊主ヴィンドボナに行きたいのかい。そうだな、歩いたら三カ月にかかるだろうよ。やめときな、途中で獣やゴブリンに襲われるのがおちさ。」

「いえ、どうしても行かなければいけない用事がありますから。それで、次の町はどっちになります？」

「ああ、次の町ならこの道をまっすぐ三日ぐらい行ったらあるぜ。それでも運が悪けりゃ獣は出てくるだろうがよ。」

たどり着いたのは粗末な小屋というのがふさわしい家。顔色の悪い痩せたおばさんがベッドに横たわっていた。

「ちょっと待ってな、いま持ってくるから。今日は肉が手に入っただ、楽しみにしてな。」

そうおばさんに言うのと竈の火をおこし、鍋をかけて中身を温める。肉を薄くスライスして火であぶってから鍋の中に放り込む。

鍋に入っているのはジャガイモのスープ。

ジャガイモも小さく刻まれているので、たまに欠片が見える程度だ。重湯のようなそれを掬って上に肉を乗せたそれが今日のお昼ご飯という事らしい。

「わるいな、ちょっと待っててくれ。先にかみさんに食わしてやりてえんだ。」

「かまいませんよ、どうぞごゆっくり。」

おそらく細かく刻んだジャガイモを大量のお湯で煮ただけだろう、味も素っ気もなさそうなスープだが、「今日は豪勢ね。」と喜んでそれをゆっくり食べるおばさんと、やけどをしないように一匙ずつ

息を吹きかけながら食べさせるおじさん。

おそらく長い事体調をくずしているのだろう、その所作は手慣れている事が傍目にもうかがえた。

ゆっくり時間をかけて一杯のスープを飲みほしたお婆さんは、疲れたのかすぐに眠ってしまった。

「すまん、待たせちまって。これがお前さんの分だ。うまいもんじゃねえが、こんなもんしかねえんでな。」

すまなそうに口を開きながら差し出したのは、肉の入っていないスープ。

向かいに座るおじさんの持っているスープにも肉は入っていない。

おそらくあの肉を全部奥さんに食べさせてやりたいのだろう。

そしてそれに文句をつける様な真似は、僕にはできなかった。

「お婆さん病気なんですか？」

「ああ、何年か前に子供ができたんだが死産でな。それからずっとあの調子だ。」

今の僕にも幾つか対応策は考えられる。

一つはリングに再生能力＋１をつけて装備させる事。

ただこれは根本的解決案ではない。少しずつ体力は戻っていくかもしれないが、病気を治したわけではないのだ。

リングを奪われでもしたら元に戻ってしまう。

二つ目はパナシアを飲ませる事。

これなら治るだろうが、数に限りがあるし秘薬と言って差し支えない効果の物をただで置いていくとあとで厄介事に巻き込まれる可能性がある。

お婆さんを治したいが、厄介事は背負いたくない。

三つ目は魔法ファイン・キュアを使う事。  
問題はこちらの世界の魔法ではない事だ。

袋に入れてある木の棒を杖と言い張る事は出来るが、呪文なんかは知らない。

できればおばさんが寝てる間にこっそりと使えればいいのだが。

「そっか。おじさん少し休んでつてもいい？」

「ああ、別にかまわんど。俺は仕事があるから一緒には居てやれんがな。あと、あまりうるさくはせんでくれ。かみさんをゆっくり休ませてやりたいんでな。」

そう言っておじさんは外に出て行った。

これならOKか。

あとはおじさんが出ている間に魔法かけて、出ていけば問題ないかな。

さてと。

僕はおじさんが離れたのを確認し、周囲に誰もいない事を確認すると腕輪についている魔石を取り換える。

魔石なしでも使えるが、魔石があつた方が効果は高い。

「ファイン。そしてLV2キュア……」

魔法を唱え終わったあと、しばらく様子を見る。

眠っている事には変わりはないが、こころなし楽そうに見える事に安堵し、魔石を元に戻す。

しばらく経ってから、起こさないよう、そつと家を出た。

「それじゃあ、僕はこれで。お世話になりました。」

畑にいるおじさんに手を振って歩きだす。  
目指すは次の町、そしてヴィンドボナ。

「ただいま、今かえ……つた……」

その日の仕事が終わって家に帰ったおじさんが、ベッドから起き上がり料理を作るおばさんを見て涙を流すのはもう少し後の話。

## 第9話

### 第9話

魔法に関する情報は手に入らなかったが、首府ヴィンドボナの方角や次の町の場所を聞いた僕は気分良く歩きだした。

人通りのないこの道で一張羅を着る必要もないかと、服を着替える。

少なくとも次の町では旅の資金を手に入れたい。

幾許かのお金と携行食、服の着替えなんかが手に入れば嬉しい。

次の町はこのあたりの領主が治める町という事で、それなりの大きさがあろう。

できれば何か本を手に入れたいが、高級品らしいので我慢が必要かもしれない。

それよりも、魔法使いがいるかもしれない。

コモンマジックでいいから教えてもらいたいな。

修行を兼ねてのんびり歩いて五日目の早暁。

やっと視界に町が入った。

町が見えたところで街道を少しそして服を着替える。

自分の格好にそれほどの興味はないとはいえ、さすがに街中を腰みの一丁で歩く度胸はない。

修行中いくらか獲物を捕らえたが、残念ながらめぼしい魔石やリングはなかった。

やはりこの程度の獲物ではこれが限界らしい。

とりあえず食料や毛皮がいくらか増えたので良しとしよう。

「結構大きい町だなあ。」

かなりの大きさの町で、周りをぐるりと壁で囲んでいる。ひよっとしたら人口5000人以上あるかもしれない。

町の門の前に立ち止まってそんな事を考える。

まだ入っていないなくても。かなり活気にあふれた都市なのがよく判る。

門衛に目をつけられたくないので、インビジブルを使い透明化した後ダッシュで通りぬける。

門を通り抜けてから路地に入り、インビジブルを解除。

無事に街中に入る事ができた。

道行く人に肉屋と毛皮屋の場所を尋ねる。

その後もう一度路地裏に行き、袋の中身をすべて毛皮に換える。

そうして準備を整えてまずは毛皮を売りに行く。

「おじさん、この毛皮買ってくれる？」

店先で毛皮をなめしていた男を見つけて声をかける。

「どれ、見せてみな。……そうだな、この毛皮なら一枚2エキューだそう。それでいいか。」

一枚2エキュー。

この世界の平民の平均年収が120エキューだから10枚売って20エキュー。

二月分の収入になる。

値段的にも悪くはない。

単なる毛皮とはいえ、余計な汚れや切り傷もないし、既にある程度なめしてあるのだから。それなりの価格だろう。

「うん、ありがとう。」

毛皮を渡し、金を受け取ると礼を言ってその場を立ち去る。  
その後もう一度路地に入り、今度は肉を袋に入れる。

約20?の鹿肉は3エキューで売れた。

現在の所持金23エキュー。

これをやりくりして必要な物を買わなければならない。  
まずは衣服、この世界に来た時には多少大きめだったとはいえ今ではかなり厳しい。

携行食とできれば調理器具。

流石に毎日焼肉ばかりでは飽きるし、調味料も欲しい。

服を数着、旅行用の小さな調理器具、岩塩。

携行食はいい物がなかったので、小麦粉を買っておく。

しめて8エキュー。

思ったより岩塩が高かった。

やはりこちらでは調味料は高級品なのだろう。

そういえば中世ヨーロッパでは胡椒が同じ量の金と取引されていた  
っていうしな。

あとは魔法を習えればいいのだが。

今更ながらに気がついたが、魔法はそう簡単に習えるのだろうか？  
貴族の家庭教師？

無理。相手は少なくとも下級貴族だろうし、それなりの謝礼が必要  
になる。

肉や毛皮は大量にあるが、一度に出せば買ったたかれるだろうし、  
悪目立ちしすぎる。

リングや魔石をマジックアイテムとして売り払ってお金を作る。  
リングや魔石を直接謝礼代わりに渡す。

これも避けたい。

こちらの世界に無い物だけにむやみにばらまくのはまずい。  
となると、他に方法は……少なくとも今は思いつかない。

まず、家庭教師は無理だろう。

傭兵？

僕は別に傭兵なんかにはなりたくないし、人間相手に戦うのも出来れば御免こうむりたい。

第一落ち着いて学べるかどうかも判らない。

兵士？

六歳児にしては身長は高いし鍛えてもいる。

だからといって雇ってもらえる可能性は低いだろうし、戦争になったら人を殺さなきゃいけない。

これも却下。

あとは……

そこまで考えたところで街に入った方法を思い出す。

インビジブル。

自分の姿を透明化し、同時に気配も消せる魔法。

狩の時によく使ったから、今では半日程度維持できる。

これを使って貴族の屋敷に忍び込み、魔法の授業を傍らで聴く。

よほど強いメイジじゃなければ察知できないだろうし、家庭教師などがそこまで強いとは思えない。

倫理観が薄れてきているなあ。

まあ、僕の目的は主人公になるわけでも、原作にかかわる事でもなく、傍から眺めていたいただけ。

次の世界の事を考えると出来るだけ強くなりたいが、別に誰かを守りたいわけじゃない。

あくまで、護身。

自分の身さえ完璧に守れば、他の事はそれほど気にしない。

知らない人間になんと言われようと別にかまわない、僕に直接被害がなければ。

僕の持っている力がこの世界でどこまで有効なのかも確認しないといけない。

前回、おじさんのところで試してみたから、ファインで大体の病気は治せるだろう。

キュアやヒーリングも問題なさそうだ。

魔法防御系の呪文に関しては残念ながら確認していない。

物理防御は狩の時に確認できたが、魔法攻撃に対しての効果が判らない。

今まで魔法を使ってきた相手などいないのだから、当然ではあるが、ぶっつけ本番にならないようにどこかで試す機会を作るべきだな。

この世界の魔法には、飛行呪文や錬金術があるからできれば覚えた

い。

操作系の呪文も面白そうだ。

あとは使い魔召喚。

コモンマジックという事だが、どういう原理なのかがさっぱりわからない。

無理やり連れてくるのか、使い魔の自主性に任せるのか。

使い魔の中には明らかに知能の低そうなものも含まれているから、恐らくは前者だろう。

その後絶対服従の契約によって使い魔を主に縛りつける、という事なのだろう。

生き物の精神を支配するほどの強力な魔法がコモンマジックといわれても、そう簡単に納得できる話ではない。

人や亜人を召喚してしまつたら、それは誘拐になるし、無理やり服従させるのは奴隷契約と変わらない。

いや、使い魔が反抗できないほど強力に縛られているなら、もつと性質が悪い。

魔法使いの祖といわれるブリミルは何を考えてこんな術式を組んだのだろう。

それを考えもせずに行うメイジにも虫唾がはしる。

メイジと喧嘩する気はないが、行動には十分注意しなければ。

ひよつとしたらこの『ゼロの使い魔』という物語はメイジに反乱を起こした使い魔の物語なのかもしれない。

それならば原作介入して手伝うのも選択肢の一つに入れるべきだろう。

まあ、原作自体を知らないなので、何をどうすればいいかわからないのだが、少なくともある程度大きな事件の周りに主人公はいるものだろう。

一応ここはファンタジーな物語として成立している世界なのだから、間違つても一般市民と動物の触れ合いの物語ではないだろうし。

以前の仮定が当たっているなら、メイジの貴族と使い魔の物語の筈だ。

そして、横暴な貴族に反抗する使い魔。

うん、イメージ的にもありそうな気がする。

いやいや、仮定の話で進んでる上に思考が物騒な方向に傾き過ぎている。

僕はあくまでも物語を見るように、事件を外部から眺める方がいい。第一、僕の魔法がどこまで通用するかというデータすらまだとっていないのだから。

まずはインビジブルで貴族の屋敷に忍び込み授業風景を見る事にしよう。

この先どうなるか判らないが、魔法を覚えて損という事はない筈だから。

## 用語説明

### 用語説明

このSSにはグローランサーというゲームの魔法やアイテム、防具などの用語が出てきます。

ただし、効果などは独自設定を採用している為、ゲーム内のモノとは違う場合があります。

### リングウェポン

指輪<sup>リング</sup>が武器になるものです。

適性のある人にしか扱えません。

リング自体にパラメーターアップの効果がついており、魔石を嵌める穴が1〜3ついています。

ケインの持っているリングウェポンは、神様特製の物で指輪ではなく腕輪の形状をしています。

本来リングウェポンを装備した状態で敵を倒すと、リングが獲れる事がありますが、ケインの持つ幻神のウィズリル以外のリングで倒しても獲れないよう設定されています。

また、リングが出て、ケインが入手を望まなければ消失します。むやみにリングが増えないようにする為の処置とお考えください。

### 幻神のウィズリル

ケインの持つ腕輪状のリングウェポン。

魔石制御力9・9・9　どの系統の魔石を嵌めても100%の習得率を持っています。

MHP（最大体力）40・MMP（最大魔力）20・ATK（攻撃力）26・DEF（防御力）26・MOV（移動）30・ATW（

行動の速さ) 18の補正がつけられています。

このリングは、例えばリング複製の魔石をつけていても複数手に入れる事はできません。

## 魔石制御力

リングには魔石制御力というものが設定されています。

これを超える魔石をつけても効果は発揮されません。

戦闘に使っていると、ごくまれに制御力が上がる事があります。

## 魔石

グローランサー世界の魔法、特技、スキルを籠められている石です。赤が魔石、緑が特技、黄色がスキルとなっています。

それぞれの石をリングに嵌めて経験値を得る事で、魔石に籠められた力を得る事が出来ます。

習得率はそれぞれ設定されており、効果の高いものほど多くの経験値を必要とします。

また、リングの穴にも色の設定がされており、色違いの場合は通常よりも習得が遅くなります。(同色に嵌めた場合を100%とする、75%にさがります。)

特殊な石として白い魔石があります。

これは装備している間だけ効果があり、外すと効果は得られなくなります。

LV1の魔石はすべてこれに該当します。

また魔石の中には一度使うと消えてしまう事により強力な効果を発揮する物もあります。

最初から持っている魔石のうち、成長促進系以外の六つはこの世界

では手に入りません。

また、魔石複製の魔石をつけても複数手に入れる事はできません。

一部の魔石は同じ物を複数つける事で、より強力な効果を発揮します。

## 防具

ファイナルガード。

グローランサー世界で主人公の最強防具という扱いになっています。防御力が非常に高く、全属性魔法に対して耐性を持っています。当然ながらそれに見合う実力を着装者に要求する為、現在のケインでは着る事は出来ませんがともに動けなくなります。着装者に最適なサイズに変化する魔法のジャケットとお考えください。

## アイテム

### パナシア

あらゆる病気を治す霊薬です。

## 魔法

地、風、炎、雷、冷、聖、闇、精、物の9種類の属性があります。便宜上、回復魔法は聖、補助魔法のうち肉体強化や物理防御などに関するものは物、精神攻撃や魔法防御などに関するものは精に分類します。

ゼロ世界の魔法では水系統の魔法を冷に分類します。

虚無はエクスプロージョンの場合、精を除いた8属性に分類します。記憶、加速は精に分類します。

## 特技

LV1～5まであります。

LVが高いほど効果は強力です。

例としてダッシュという特技がありますが、LV1の場合通常の二倍のスピードで移動できますが、LV5になると縮地レベルの移動が可能になります。

## スキル

LV1～5まであります。

LVが高いほど効果は強力です。

例として状態異常無効化というスキルがありますが、LV1では毒・猛毒の無効化のみですが、LVが上がるにつれて無効化できる状態異常が増えていきます。LV5ではすべての状態異常を無効化できます。

話が進むにつれて順次書き足していきます。

気付いた点、不明瞭な点がありましたら感想でお知らせください。

## 第10話

### 第10話

貴族の屋敷に忍び込み、家庭教師と貴族の坊ちゃんの授業を見ること10カ月。

正直あまり意味がなかった。

何しろ、“杖と契約できたのだから、魔法を使えます。杖の先に意識を集中して効果をイメージしながら呪文を唱えてください”などという非常に感覚的な教え方をしているのだ。

系統魔法にしても、呪文を教えて出来るかどうかまずは唱えてみるというものであり、スムーズにできればその系統という何とも残念な教え方なのである。

知識には魔法学校というものや、士官学校というものもあるのだが、そちらの方に忍び込んだ方がましかもしれない。

もつともそちらでも同じような教え方をしている可能性が大きいのだが。

散々悩んだ自分がバカみたいである。

こんな事なら試しに自分で呪文を唱えてみても良かった。

なまじ考え過ぎた為に却って無駄な時間を過ごした事に軽くショックを受けた。

それでも10か月も滞在したのは、坊ちゃんの物覚えが悪く、系統魔法に進むまでに手間取ったからである。

ただ、僕も魔法は使えるようになった。

コモンマジックはすぐに使えるようになったし、系統魔法もドットレベルのものは一通り覚えた。

ライン以上がないのは坊ちゃん物覚えが悪く、そこに到達するまでに時間がかかりそうだからだ。

気になったのは一度に二つの魔法を同時に行使できないという点。

何故、空を飛びながら魔法を撃てないのか？

シールドを張りながら攻撃できないのか？

考えてみれば簡単な事で、彼らは魔力のコントロールができないのである。

正確には微細なコントロールが全くできない。

一つの呪文を唱えるのに魔力をすべてそちらに回す。

魔力が1必要だろうと、10必要だろうと100の魔力があればそれを全部そちらに回して呪文を唱えるのである。

それでいて魔法の効果は必要な分だけ。

残りの魔力は何処にもいかずに体の中に戻る。

おまけに一つの杖では一つの魔法しか使えない。

はつきりいつて効率の悪い事この上ない。

二つ杖を持ってそれぞれに魔力を流せば簡単に同時行使が可能なのに、それをしようとしてもないのである。

もしかしたら一つの杖でも、魔力を集める部分を区分けする事で可能かもしれないのに。

言い方が悪かった。

正確にはやらないのではなくできないのだろう。

アカデミーとやらでいろいろ研究をしているようだが、あまり頭のいい研究をしていそうにない。

僕はいまだにドットスペルしか使えないが、それでも同時行使する事で疑似ラインスペルみたいなものを使える。

方法は簡単で、それぞれのスペルを唱えて混ぜ合わせるだけ。

この調子でいくらかでも合わせていけるので、傍から見るとスクウェアクラスにも見えるだろう。

もつとも、ライン以上の呪文を知らないので、例えば風のスクウェアスペルである遍在などは作れない。

出来るのはあくまでもドットスペルをかけ合わせる事だけである。まあ、それでも十分だろうとは思うが。

その副次産物で、疑似協力魔法の開発にも成功した。

本来の協力魔法より威力は落ちるが、十分実用可能なレベルだ。

元々の魔法がほぼ単体攻撃しかできないので、範囲魔法が使えるようになったのはありがたい、

そう言えばブレイドというコモンマジックだけではどうしてもうまくいかない。

棍に纏わせる事は出来るのだが、刃物のようににはならないのである。

棍の周りを魔力が覆うだけで、威力増強にはなるのだが。

丸い物を丸く覆ったところで形状的にはまったく変化がない。

やはり棍という武器は斬るという事には向いていないのだろう。

フライ、レビテーションなどはグローランサーの魔法の中にはない魔法だ。

空を飛ぶ、物を浮かせる。

言ってみればただそれだけの効果なのだが、これほど戦闘に役立つ呪文も珍しい。

魔法を使えない相手なら、レビテーションで浮かせてしまえば勝ちである。

空を飛べない相手なら、こちらに攻撃される前にけりがつくのだ。魔力消費もそれほどではないので、他の呪文との同時行使もあまり負担にならない。

何よりありがたいのは、コモンスペルなので言葉一つで発動できる。

錬金の魔法は原理がよくわからない。

錬成の魔法はその物の中に含まれる物を一か所にかき集めるだけなので理解できるのだが、それでも量が増えたりはしない。

原子から変えてしまうのだから、とんでもない魔法だと思うのだけど、ドットクラスから使える魔法。

クラスによって作れる金属に差ができるというけれど、呪文はみんなおなじ。

籠める魔力が違うという事らしいが、やってる事は全部原子の書き換えという想像を絶するもの。

正直銅や鉄、金や銀などの金属の何処にそんな違いがあるかが判らない。

どれもこれも単一原子の集合体なのだから。

できる大きさが違うと言われた方がまだ納得がいく。

合金の方が難しい気がする。

複数の原子をバランスよく分配しなければならなのだから。

でも青銅はドットクラスでも作れる。

金はスクウェアでないと作れない。

ちなみに僕には錬金が出来なかった。

非常に役に立つ魔法なので、残念な事である。

他の土系統の魔法は使えるのに… 何故だ？

いつか必ず使えるようになりたい。

町を出た僕はヴィンドボナに向かって旅を続けながら、魔力コントロールや呪文開発などに勤しむ。

三か月の旅程は所々での寄り道などで大きく伸び、ヴィンドボナについた時にはそれから一年が経っていた。

## 第11話

### 第11話

帝政ゲルマニアの首府ヴィンドボナ。

例によってインビジブルで姿を消し、路地裏で魔法を解く。  
肉や毛皮を売って金を手に入れる。

大きな町なので何箇所かで売る事が出来たので懐はかなり暖かい。  
持っていた毛皮や肉は殆ど売り払った。

現在の所持金、258エキュ。

これだけ大きな町だし、ひよっとしたら本を買えるかもしれないと  
考えながら歩いていたら、前の方が突然騒がしくなった。

近づいてみるとそこには、今までの旅でもたまに見た景色。

喚き散らす貴族と平伏する一般市民。

どうせ、ちょっとぶつかつたとかで無礼討ちだの騒いでいるのだろ  
う。

いちいちかわつていたらきりがなし、厄介事に巻き込まれるだ  
けなのでスルー。

ちよつと大きいだけの8歳児に喧嘩を止めるなんて出来るわけない。  
本気でやればなんとかなるとは思うけど、見知らぬ他人の為に恨み  
を買うのは御免こうむりたい

世の中には何の見返りもなく人助けをする正義の味方なんて存在し  
ない。

力を持つ者の義務なんて関係ない。

そんな義務などそもそも存在しない。

そんなものは、力のない者の幻想か、力を持つ者が好き勝手やる為の言い訳だ。

怨むんだったら、身分格差を作りだしたブリミルを怨め。  
力がないのが悔しかったら自分で強くなれ。  
そんな事を考えながら冷めた目で眺めていた。

魔法が使えるというだけで優越感に浸っているのであろつ馬鹿は、  
この世界ではそう珍しいものでもない。

肩がぶつかった程度でわめき散らすさまは非常に見苦しいが、そんな貴族は何処にでもいる。

それこそ、そうでない者を探すのが難しい程に。

結局散々ぶつたたいて去っていった。

あとに残ったのは血まみれの人。

まだ生きてはいるようだが腕も足も骨折している、そこに横たわったまま動けない男性と、「パパ」と泣き叫びながらしがみついている4歳ぐらいの女の子。

周りの人達もかわいそうになどと言いながら散っていく。

あつという間にその子の周りには誰もいなくなった。

僕も歩こうとしたところで視線を感じる。

一つは女の子の助けを求める悲痛な涙目。

それはいい、いや、よくはないが、二つ目の視線が問題だ。

それがどこからきているのが判らない。

狩で生活をしていたので、気配を殺す事には慣れているし、感じる事にも慣れているのに。

その視線の主が特定できないのだ。

正体のつかめない視線。

考えこんだ僕は、気がつくやうな女の子にしっかりとズボンにしがみつかれていた。

はあ、面倒な事に巻き込まれてしまった。

さすがに、この手を振りほどいて立ち去れるほど鬼畜な精神は持っていない。

さっさと通り過ぎなかったのが悪いんだろうな。

「お嬢ちゃん、大丈夫かい？」

目線を下げ、頭を撫でながら聞いた僕に、女の子は泣き声をあげてしがみつく。

話す言葉は殆ど意味をなさない。

ただ、「パパがあ」と言うだけ。

仕方ないので、女の子にしがみつかれながら男の人の傍まで行く。

結構体格のいい人だ。

身なりも街を歩いている人達に比べればお金がかかっている。

あちこちの骨は折れているし、口から鮮やかな血を流している事から内臓にもダメージがあるようだが、呼吸はしっかりしているの命に別状はなさそうだ。

骨が肉から飛び出ているようなグロテスクなシーンを見ないで済んでよかった。

出来る限り傷に触れないように持ちあげて、もう一度女の子に訊ねる。

「お嬢ちゃん、お家はどこ？パパを連れて帰らないと。」

「グスッ、よくわかんない。パパといっしょにきたただけだから。」

「ここに来たのは初めて？」

「うん。」

この世界は平民には優しくないが、僕にも優しくない。

単純に家まで送り届けて済ませたかったのに。

とりあえず安宿に行つて三人部屋を借り、男の人を寝かせる事に決める。

料金は前払いだったが一人15スウで済んだ。

本来一泊10スウなのだが、日がまだ高い為もあり、多少上乘せされたのは仕方ないだろう。

50スウを払つて部屋のかぎを受け取り、二階の部屋に直行する。

男の人を寝かせた後、心配そうに見つめるお嬢ちゃんに優しく話しかける。

「お嬢ちゃん、ちょっとパパを見てくれる？お兄ちゃん買い物に行つてくるから。」

うなずいたのを宿を出ると包帯や添え木に使えそうな物や簡単に食べれそうな物を買ひ込む。

その間中さっきの視線につきまとわれるが、やはりどこから見ているのが判らない。

宿の中では感じなかったので、外からの視線だと思うのだが。

そこまで考えたところで、ひょっとしたらマジックアイテムなのかもしれないと思いつく。

離れた場所から見ているのなら、誰が見ているかなんて判るわけがない。

見ているという気配はするが、人物を特定できないのもうなずける。

だが、なぜ？

人目に触れる様な事をした覚えはない。

むしろ目立たぬように行動してきたつもりだ。

怪我人を助ける子供というのはあまりいいかもしれないが、皆無というわけでもないだろう。

マジックアイテムなどを使って監視される理由に皆目見当がつかない。

そんな事を考えながら、必要な物が揃ったので宿の部屋に戻る。

「ただいま、お嬢ちゃん。お願いがあるんだけど、下に行ってお水をもらってきてくれない？」

今いるのはあまりお金を持ってない人が泊まるような宿屋。

頼んだって、お金を払わない限り持ってきてはくれない。

だから取りに行く必要があるのだ。

お嬢ちゃんが水を取りにいつている間に、買ってきた物をテーブルの上に並べて準備をする。

男の人はまだ意識を失っているので、折れてずれた骨をひっぱって正しい位置に戻す。

意識があつたら多分絶叫するような痛みがあるだろうな。

僕は別に医者でも何でもないのだから、以前本で読んだ治療法以外は行えない。

まあそれも、骨折したら骨をずれないように合わせましょう、というレベルのものなのだが。

「お兄ちゃん、これでいい？」

女の子が持ってきたのは小さな水差し。  
必要量にはまるで足りない。

だが、女の子の大きさからすれば、それ以上を頼むのもはばかられてうなずく。

今すぐ必要なのは体を拭く分だけ。

あとは治療が終わってからでも何とかなる。

「うん、ありがとう。その盥に入れてくれる？」

ベッドの脇に置いた盥に水を入れてもらうと、手拭で体中の血を拭きとる。

その後添え木をあてて骨折部分を固定し、包帯で動かないように上から巻きつける。

ひそかにキュアを内臓と骨折部分にかけて軽い回復を促す。

その後水をバケツ一杯持つてくる。

「お嬢ちゃんのパパ、怪我しちゃったから、これからお熱がでるの。お兄ちゃんと一緒に看病しよう。」

「うん、ありがとうお兄ちゃん。あたしクラリスっていうの。」

「そうかい、クラリス。お兄ちゃんはケイだよ。」

「うん、ケイお兄ちゃん。」

## 第12話

### 第12話

クラリスは精いっぱい頑張っていたが、精神的に疲れていたのだから、日が暮れる前に眠ってしまった。

眠ったクラリスを別のベッドに寝かせ、男性の額の手拭を取り換えながら一人つぶやく。

「なんでこんな事になったんだか……」

この街に來た事を早くも後悔しそうだった。

余計なお荷物を背負い込むし、見知らぬ誰かに監視もされている。着いてそうそう厄介事ばかりである  
できるだけ早くこの街を離れた方がいいかもしれない。

怪しまれないようにかけたキュアはごく弱いもの。

内臓のダメージはある程度和らげる事が出来たであろうが、折れた骨がくつつくには程遠い。

腕も骨折したままだから松葉杖も使えないだろうし、面倒でも家まで送り届けなければならぬだろう。

さすがにこの状況で放りだせないが、僕としてもいつまでもこの人にかかりつきになるわけにもいかない。

家族もいるだろうからできれば明日には動かしたいところだな。

看病中で傍を離れられないので、買ってきた物で適当に夕食をします。

クラリスはよく眠っている。

時々寝言で、パパママとつぶやいているので母親もいるのであろう。柄でもない、と思いながらはだけた毛布をかけ直す。

ベッド脇に置いた椅子に座って、濡れ手拭の交換をする。

予想通り熱が出てきたので、アイスバレットを最小威力で唱え、盥に氷を浮かべる。

この世界に冷凍庫なんてないのだから、氷の入手方法なんて限られている。

こんな安宿で間違っても氷が出てくるわけがない。

実際、盥の水でさえ、既にぬるま湯と呼ぶのがふさわしい温度だ。さすがにこんな水ではたいして役に立たないので、魔法で温度を下げたというわけだ。

たまに手拭を換える以外やる事が何もないのだが、看病中にできる事は限られている。

こつという時本があればとも思うが、今の状況ではない物ねだりだ。

部屋から出る事も出来ないこの状況でできる事と言えば、魔力の運用訓練ぐらいだ。

臍の下、丹田と呼ばれるあたりに魔力を貯め、ゆっくりと体全体にめぐらす。

以前本で読んだ、内功の呼吸法に従いゆっくり息を吐き、息を吸う。細く長い、ゆっくりとした息使い。

傍から見れば呼吸しているのかどうかも判らないだろう。

本来ならば、気と呼ばれるものの運用法なのだが、僕はこれを魔力でやっている。

こつちの世界に来てからじっとしている時はこれをずっとやっている。もう3年になる。

本で読み齧った知識だが、それなりに効果はあるようで、今ではあ

る程度効果が出ている。

我流であるので効率はすこぶる悪いだろうが、身体能力強化にも役立つ、筈だ。

筈と言ったのは、今のところ使いながら動けるレベルには達していないから。

動きながら使えるようにならないと、肉体強化の意味がない。

もつとも完璧に体中にめぐらせる事はまだできない。

3年かけて、やっと手足の方は上手くめぐる様になったのだが、体の中心線に沿ってめぐらせようとすると、数か所で痞えてどうにも上手くいかないのである。

心臓、尾？骨、喉元の辺りで痞え、背骨に沿ったラインが上手くめぐらない為、頭までめぐらないのだ。

ラインが氷塊で詰まっているような、マグマで堰き止められているような、冷たいのに熱いそんな不思議な感覚がある。

体中の魔力を練り上げ、心臓部の関門に向けて流す。

数か月前までびくともしなかった固くて重い壁だったが、今では少し罅が入った感覚がある。

今度は、その罅に向かって水を染み込ませるようにゆっくりと魔力を流す。

できれば一日中やっていたいところだが、看病中の為意識を集中させるわけにもいかない。

意識を逸らすと途端に効率が落ちる。

手足の方は上手くつながっているのでゆっくりと動く分には問題はないが、心臓部に集めた魔力は今にも消えそうなほど頼りなく感じる。

今にもかき消えそうな魔力をそれでもゆっくりと関門に染み込ませ

る。

染み込んでいくのが感覚では判るが、関門の向こうに到達はしていない。

途中で何かに吸い込まれるように半分ほどいったあたりでかき消えてしまう。

まだまだ先は長そうだ。

## 第12話（後書き）

主人公は地道な鍛錬で力をつけていこうと思っています。

我流なので効率も悪く、そう簡単には強くはなれませんが。

タグに中国武術を入れたのはこの為だったりします。

系統魔法にはさほどの才能はないので、うまく強くなってくれと  
いいんですが……

人前で使えない魔法に頼るわけにもいかないと思うので、それ以外、  
という事で。

死亡フラグの多い世界ですから、何とか育ってほしいと思っています。  
す。

### 第13話（前書き）

主人公もいろいろ考えているというお話です。

長い割に脳内完結してますので、時間経過はありません。

## 第13話

### 第13話

時間があるうちに、これからの行動方針についても考えておこう。

この世界はこれから物語になる様な事件が起こる筈だが、僕は前情報を殆ど持っていない。

神様の言った言葉から推測するしかないのである。

キーワードは『ゼロの使い魔』『主人公達と同年齢』『魔法を使う者は貴族と呼ばれる』

その他にもいくつかあるが、大きなものはこの三つだろう。

以前考察したように、ゼロというのはおそらく失われたと言われている系統『虚無』を指すのだろう。

言い方を換えれば虚無の系統を使える魔法使いの使い魔、ということだ。

伝説とすら呼ばれる系統なのだから、使える人間は相当目立つと思う。

今まで見た事もない魔法を使う者、その情報収集が必要になる。

各国の情報などを調べようにも、子供一人で手に入る情報には限度があるし、情報収集にかまけて修行ができないというのも問題がある。

個人的な冒険物だったら大丈夫だろうが、戦争という可能性もあるのだから。

過去にも聖地奪還とやらの名目で何度か大きな戦争があったと聞くからそれかもしれない。

そうになると、かなり鍛えておかないと巻き添えを食って死ぬ事になりかねない。

死んでもこの世界を体験したという扱いにはなるが、澱みが残ったらどうなるかは聞いていない。

多分、ろくでもない事になるんだろう。

それは出来るだけ避けたい。

そしてその使い魔。

『ゼロと使い魔』ではなく『ゼロの使い魔』という題名からして、恐らく主役は使い魔の方だ。

伝説と呼ばれる魔法の使い手の使い魔なのだから、恐らくその使い魔も今までの常識は通用しない。

一般的に、使い魔はその主の能力に合わせて選ばれとされている。今までにない系統ならば召喚される使い魔も今までにない種族、という可能性が高い。

以前使い魔はドラゴンなどの類ではないかと推測していたが、よく考えてみればドラゴンも使い魔として皆無というわけではないのだ。今まで使い魔として召喚された事のない種族と仮定するならば、その種類は限られるだろう。

6000年の間に大抵の種族は召喚されているだろうから。

ブリミル、という魔法使いが虚無であり、四体の使い魔を従えていると言われているが、その詳細は一切不明。

6000年も経っているのだから仕方のない事ではあるのだけれど。まあ、ブリミルは例外中の例外だろう。

通常、使い魔は複数呼びだす事は出来ないのだから。

規格外の理由が『虚無』なのかもしれないが、ブリミルと現代の虚無の魔法使いを比べる事も難しい。

6000年前に失われた系統をそっくりそのまま使える、という事の方が有り得ないのだから。

魔法というものは通常習って覚えるものである。失われたという事なら、教えられる人はいない。

つまり、虚無の魔法使いは、虚無の系統を使えないと思っていい。使えるようになるには、ブリミルの事を調べるしかないのだ。

この世界でブリミルは神として崇め奉られている人物。

ブリミル教というハルケギニア随一の宗教。

そしてその総本山ロマリア。

ブリミルの事を調べるには、ここに行くのが一番だろう。

おそらく虚無の魔法使いもそこを目指す事になるだろうから。

正直ロマリアには行きたくない。

貰った知識で判断する限り、ろくでもない国なのだから。

できるだけ近づかずに情報収集のみにとどめておきたいところだ。

ロマリアに行くのは最後の手段にしよう。

次は第二のキーワードについて。

神様は僕が主人公達と同年齢と言っていたから、普通に考えれば後七年の時間がある。

さて、主人公達？

今まで主人公は使い魔だと思っていたが、それなら達というのはどういう事だ。

ドラゴンかどうかはわからないが、物語の主役になるほどの使い魔なら、間違っても犬猫の類ではないだろう。

使い魔達という事なら、ブリミルの使い魔は確かにこれに当てはま

る。

だが、複数の使い魔を召喚したのは今のところブリミルだけ。

ブリミルの使い魔達が主役、という事はさすがに考え難い。

6000年前の生物が今なお生きている、という事はあるかもしれないが極めて稀な事は確かだ。

第一、ブリミルの使い魔が生きているのなら誰もが知っている存在の筈だ。

だが、伝承の中でも四体の使い魔としか言われていない。

能力どころか、姿形すら伝わっていないのだ。

死んでいるからこそ何も詳しい事がわからないと見た方がいいだろう。

『ゼロの使い魔達』ではなく『ゼロの使い魔』なのだから、使い魔はおそらく一体。

使い魔とその仲間達と考えるのが一番妥当な線だろう。

わざわざ同年齢にした事についても疑問が残る。

ドラゴンと仮定しても、その寿命は数百年から数千年、15歳なんてほんの赤子にすぎない。

第一、同年齢という必要性はまったくない。

異種族と同年齢にしてもメリットなんてない。

もし寿命の短い生物だったら？

15歳と言えはかなりの老齢、下手したら数年で死亡する事になる。主役があっけなく寿命で死ぬというのは流石にないだろう。

もし寿命の長い生物だったら？

さつきも言ったようにドラゴンにとって15歳なんてまだ赤子もいないところだろう。

そんな年齢に合わせる理由なんてない。

もっと年を取っていても、メリットこそあれデメリットなんてない

のだから。

主役が赤子では、話が進むわけがないだろうし。

たんに原作開始10年前に送ると言わなかったという事は、そこにも何らかの意味がなければおかしい。

まさか、使い魔は亜人なのか？

今まで亜人が召喚されたという事例はない筈だ。

確かにハルケギニアにすむ生物ではあるが、人類とは敵対する種族。知能の低いオークやゴブリンなどは討伐対象になるぐらいだから、召喚されたとしてもすぐ殺されるだろう。

エルフや翼人も状況は同じだが、彼らは先住魔法が使える。

系統魔法と呼ばれるメイジの魔法より強大な力。

何度かエルフと戦った過去があるが、10倍以上の兵をそろえてようやく互角に戦えたという。

そんな種族が召喚されるのだったら、大騒ぎになる筈だ。

召喚した途端に殺し合いになる可能性すらあるのだから。

使い魔召喚には鏡が出るといふ。

おそらくそれが門の役割を果たすのだろう。

ならば反対側、つまり召喚される側にも門が出てもおかしくはない。知能の高い亜人がそんな得体のしれない物に手を触れようとするだろうか？

もし前例があるのならば、まず間違いなく鏡が出た瞬間に逃げ去るであろう。

もっとも、先に建てた仮説が正しければ、虚無の使い魔として召喚されるのは6000年ぶり。

それだけ長い間召喚されていないのなら、既に忘れ去られているという可能性はある。

事例がないのは、6000年前から召喚された事がないから。

そう考える事も出来るが、ならば亜人というのも考えられるのか？  
答えは否だ。

ブリミルの使い魔の種族は判らないが、少なくとも亜人ではないだろう。

その亜人と対立しているのが、他ならぬブリミル教なのだから。  
神様の召喚した種族と戦おうとする宗教はないだろう。  
例え現在伝承に残っていないなくても、だ。

そうになると、召喚される生物のあてが全くない。  
珍しい生物を召喚した者という事で調べるしかないな。  
絶滅していない事を祈ろう。

三つめのキーワード、これについては少々間違っているとわづるを得ない。

魔法を使えない貴族もいるし、貴族ではないのに魔法を使える者もいる。

もつとも前者はゲルマニアだけの特殊事情だし、後者は何代か前は貴族だったという事になるのだが。

だからこそ僕も、傭兵に魔法を習おうかと考えた事もあるのだ。  
まあ、人を殺さなきゃいけない可能性のある職業になんて就きたくないので諦めたのだが。

だが、一般的に貴族は魔法を使えると思って差し支えないし、貴族以外でも魔法を使える者は少数ではあるがいるという事がわかった。

先程立てた、虚無の魔法使いは魔法を使えない、という仮説が正しいのならば、貴族で魔法を使えない者から調査するのがよさそうだ。  
現在ゲルマニアにいるが、ゲルマニア貴族は後回しでいいだろう。

この国は貴族も爵位を失う事が多いし、魔法を使えない者が貴族になる事も出来る。

貴族ばかりを調べるわけにはいかないし、没落した貴族まで入れたらそれこそ手が回らない。

他の国でいなかったら調べるといふ事でいいか。

貴族の中に見つからなかったら、次は傭兵などの貴族では無いメイジを調べる。

さすがに平民まで調査範囲に入れると、いつまでたっても終わらない。

早期に発見される事を祈ろう。

あとは身を守る為の修行が必要だろう。

武器として棍を持つてはいるが、戦う場所すべてで長物を振り回せるとも限らない。

いや、狭い室内や路地での事も考えたら、武器を使う事の出来ない場所だつてある。

素手でも戦えるようにしなければならぬだろう。

素手で戦うのなら身体能力の強化は必須である。

魔法で強化は出来るし、いまやっている魔力での内功法が上手いけば更なる強化が見込める。

だが、強化されるのはあくまでも地力に依じて。地力が低ければ大した意味がない。

幸い、魔石のおかげで効率がいい。

地力を伸ばす環境は整っているのだから、あとは努力あるのみである。

最低でも15歳までにファイナルガードを身につけられるようにしたい。

あれを着る事ができれば、生存確率はかなり上がる筈だから。

内功法。拳法。棍術。系統魔法。グローランサー魔法。そして、二つの世界の融合魔法。

とにかく15歳までに鍛えられるだけ鍛えなければ。

これだけやる事が多いと情報収集の方は誰かに頼んだ方がいいかもしれない。

ただ、頼む相手がいない。

この世界には知り合いなんていない。

ただでやってくれそうな心当たりなんてない。

報酬といっても、僕が狩で稼げる金額はたかが知れている。

最悪、リングと魔石を報酬に出す事になるかもしれない。

交渉相手選びには細心の注意を払わなければいけないな。

### 第13話（後書き）

主人公は考えましたが、情報が少ない為、これが限界でした。

## 第14話

### 第14話

「む……ん、ここは……」

看病していた男性が目覚めたのは、翌早朝の事だった。ようやっと太陽が顔を出した時間なので、クラリスちゃんはまだ夢の中である。

「気がつかれましたか？気分はどうです？」

看病をしている間に何度か能力解析を使って確認しているが、回復は順調だった筈だ。

体力がおちているのは大怪我の後だから当然だし、熱もまだ下がったわけではないが、少なくとも後遺症になるような異常は発見できなかった。

「君は？」

意識はしっかりしているようだ。

治療にかけた魔法はごく弱いものだったから、殆ど自力で意識を取り戻したのだろう。

この世界の人間はかなりタフなようだ。まあ、そうでなければ魔物に襲われるような世界で、暮らしていく事など出来ないだろう。

理知的な光を宿す灰色の瞳。

クラリスちゃんによく似た蜂蜜色の髪。

年の頃は30前後か。

なかなかの男前だ。

体中まだ痛いだろうに、体を起して礼をしようとするのを慌てて押しとどめる。

「怪我人なのでですから動かないでください。僕はケイと言います。クラリスちゃんはあちらで寝ているので、心配なさらずに。」

先手を打ってクラリスちゃんの事を教えておく。

娘を心配するあまり無理やり動かれてはたまらない。

できるだけ安静にしていってもらわないと、せつかくの治療が水の泡だ。

「そうか。ありがとう。私の名前はアルセス。君が看病してくれたみたいだね。」

「ええ、まあ。」

「ところで私を助けてくれた人は？君のご両親かな？良かったら挨拶をしたいんだが。」

「必要ありません。助けたのは僕ですし、一人旅の最中ですから。」

「え、き君がかい？これはすまない。」

「別にかまいませんよ。ところで家はどこですか？家族もいるんでしょう？」

「あ、ああ。そうだね、すまないけど家まで送ってくれないかな、この街にあるからそんなに時間もかからないし、このかつこじや文も書けないから。心配していると思うんで、できるだけ早く帰りたいんだ。君にも助けてくれたお礼をしたいしね。」

「……わかりました。荷車を呼んでくるので、ちょっと待っていてください。」

そう言って部屋を出て、荷車を探しに外に出る。

……ただ、視線を感じる。

こんな朝早くからなんて見張られなきゃならないのか。見た目普通の8歳児な筈なんだけどな、多少背が高いので10歳前後に見えるかもしれないが、あくまで普通の少年。

別に突飛な服装をしているとかいう事もない、どこにでもいるような平凡さ。

そんな少年は何処にでもいる。

わざわざ一日僕一人をつけまわす必要なんてない。

それともアルセスさんが狙われているって事だろうか。

いや、それは可能性が低い。

狙われてるなら、昨日のうちに息の根止められている筈だ。守られているなら助けに来ない理由がない。

実際、昨日僕が手を貸さなかったらあの場で死んでいた可能性が高いのだから。

子供が助けようとしているのを見たら、普通は逆に止めに入るだろう。

考えても判らないので、とりあえず保留にしておこう。

どの道彼ら親子を家に帰せば、狙いがわかる。

視線を感じる中出歩きたくはなかったので、宿の人に頼んで荷車を呼んできてもらう事にした。

家まで送り届けるのもやめときたいところだが、これで放りだすのも気が引ける。

係わってしまった間抜けな自分が悪いのだと諦める事にした。

まあ、悪い人ではなさそうだけど、監視者の存在があるから素直に出会いを喜ぶわけにもいかないし。

部屋に戻ったら、クラリスちゃんがアルセスさんに抱きついて泣い

ていた。

抱きつかれているアルセスさんの顔色がちょっと悪い。

まあ、傷口に抱きつかれればそうなるよな。

脂汗を流しながらもクラリスちゃんに穏やかに話しかける姿は涙を誘う。

勿論、実際に泣きはしないが。

「クラリスちゃん、今からお家に帰ろうか。」

そう言いながらクラリスちゃんの頭に手を乗せ、柔らかく撫でる。

アルセスさんにしがみついていた力が弱くなったところで、そっと引き離す。

「表に荷車を呼んであります。まだ歩かれるのは無理ですから僕が抱えますので。」

そう言つて、やったのは俗にいうお姫様だっこ。

まさか成人男性相手にやるとは思っていなかった。

昨日もやったのだから、今更という気もするが、相手が寝ているのと起きているのでは気恥かしさが違う。

ちなみに荷物を入れた袋は背中に背負っている。

大した重さではないが、クラリスちゃんには重いし大きいだろう。

袋の中身は、食料や衣類、毛皮や携行調理器具。

万が一に備えて作った、簡単な杖。

杖は旅の途中で作った物。

魔法を使わなければならない状況に陥った場合を考慮して、持った方がいいと判断した。

30? ほどのごく短い物だが、魔法を使う分には十分だろう。今まで一回も人前で使った事はないが、修行の時には杖を持った稽古もしている。

これを持っていないと人前で魔法を使えないので、万一襲われた場合、身を守るには杖を持ったままでの戦闘訓練も必要だと思ったのだ。

粗末な木の杖だが、できるだけ堅い木を選んだので、そう簡単に折れる物でもない。

土系統はあまり才能がないのか、錬金も固定化もまだ使えないので、素材の硬さで選んだ。

まあ実際にこの杖で殴り合いをしようとは思わないが、知らない人が見ても護身用の武器として見てくれる筈だ。

ちなみにブレイドの魔法は、やっぱり上手く使えない。

魔力を纏っただけで、刃物のようににはなってくれなかった。

それでも威力は上がるので使用に問題はないのだけれど、なんか納得がいかない。

杖剣を手に入れてから、改めて問題点を確認しよう。

「クラリスちゃん、前を歩いて扉を開けてくれるかな?」

「うん。」

「アルセスさんは出来るだけ動かないようにお願いします。揺れるので痛みがあるかもしれません、我慢してください。」

「あ、ああ。わかった。ありがとう。……それにしてもケイ君力持ちだね。まだ10歳ぐらいだろ。」

「8歳です。これぐらいできなきゃ一人旅なんてできませんから。」

そう言うとゆっくり歩き出す。

やはり骨に響くのか、時折顔をしかめるアルセスさん。

痛いようだが、そこは我慢してもらうしかない。

アルセスさんには悪いが、レビテーションで運ぶ気はない。

妙な視線の事もあるし、できるだけメイジである事は隠しておいた方がいいからだ。

あれが僕狙いだとしても、ただの8歳児だと思ってくれた方が対処がしやすいから。

荷車まで運んで、一旦座ってもらった後、袋から毛皮を取りだし敷き詰める。

旅の途中で使っていたので売らなかったのだが、保存状態は悪くはない。

改めてそこに寝てもらい、不具合がないかを確認する。

振動があるのは仕方のない事だが、これで多少なりとも和らげる事が出来るだろう。

そうして、走り始めた荷車は、遠目からでもよく見えるお城を目指していた。

やっぱり揺れで傷が痛むのか、呻き声を上げるアルセスさんの看病と、クラリスちゃんのお守りで手いっぱいでは周りを見る余裕のない僕はまったく気付けなかった。

## 第14話（後書き）

これでストックがつかまりました。

次話は週末までには投稿したいと思います。

## 第15話（前書き）

自分で書いてて、文才のなさに絶望した。

それでも読んでやろうという心の広い方だけお進みください。

## 第15話

### 第15話

荷車を走らせて向かった先は、お城にほど近い大きなお屋敷。

そう、まるで貴族が住んでいるかのような……って、ええ！？

「……あの、つかぬ事をお聞きますが、貴族様でいらっしゃいますか？」

色々な予想はしていたけど、こんなところに連れてこられるとは想像もしていなかった。

何をどう間違ったら、貴族が街中で半殺しの目に遭わなきゃならないんだ。

せいぜい多少羽振りのいい商人辺りかと思っていたのに。

大体、アルセスさん杖持つてないじゃないか。

治療する時、一応服は脱がせたから間違いないぞ。

……って、しまった。魔法つかったけど、ばれてないだろうか。

意識のない状態でかけたから、系統魔法でない事はばれてはいないだろうけど、治りが早いのを疑問に思っているかもしれない。

魔法が使えるとばれたら、いろいろ面倒な事になるかもしれない。

願わくは、ばれていませんように。

「いや、貴族じゃないよ。紹介が遅れたね、私はリーヴス商会ヴィンドボナ支店を預かっているアルセス・リーヴス。よろしくね、奇妙なメイジ君。」

ばれてる。

なんで？どこで？どうして？

魔法使ったのなんてごく弱いキュアとアイスバレットの2回だけ。しかもその時、アルセスさんは間違いなく気絶してた。

確認してから使ったから、間違いない。

ひょっとしたら、最初っから僕との接点を作るのが目的だったのか？いや、それにしておかしい事が多すぎる。

わざわざこんな少年に罠を仕掛けるなんてありえない。

8歳児を本人の意思を無視してどうにかしようと考えたなら、一番にとる手段としては誘拐しようとするだろう。

特に貴族の子供でもなければ大人の一人二人で十分間に合うのだから。

メイジだとばれていても、大きな商会の支店長なんて偉い人がわざわざ出向く価値なんて僕にはないし、あの怪我だって嘘じゃなかった。

一つ間違えれば確実に死んでいた怪我。

いや、手当が遅ければよくて不具、悪ければ死。

そんな危険な事を支店長ともあろうう人がわざわざする必要性がない。

ならばなぜ？

いや、この際それはどうでもいい。

今はとにかくここから離れる事を優先しよう。

「……では、僕はここまでで。あとは自分で帰ってください。」

自分でもわかるほどに顔色を変えた僕は、素早く立ち上がって荷車を降りようとする。

「！ちょっと待って。驚かせたのだったらごめん。そんなつもりは

なかったんだ。ただ確認したかったただけだったんだけど。」

僕の反応に驚いたのか慌ててアルセスさんが引きとめにかかる。荷車を引いている人も自分が乗せていたのがメイジだったと知り、ぎよっとしている。

「別にケイ君に含むところがあるわけじゃないんだ。せめて、お礼ぐらいさせてくれないかな。君が命の恩人である事には変わらないんだから。」

「いくつか質問していいですか。」

「私に答えられる事なら。」

「昨日、貴方を助けたあたりからずっと視線を感じています。心当たりはありますか？」

「それはどんな視線だい？」

「おそらくですが、何かのマジックアイテムで覗いていると思います。部屋の中までは覗けないようですが。」

「……そうだね、心当たりはあると言えばあるかな。でも往来ではちょっと話せない。家まで来てくれたら話せると思うんだけど。」

「そうですね……。それではその心当たりは僕に危害を加えようとするでしょうか？」

「その心配はない。むしろ感謝するんじゃないかな」

「……わかりました。ご自宅まで付き合います。ただし、この件に關して詳しい説明をしてください。」

「わかった。ケイ君に迷惑をかけないと約束するよ。」

「何故、僕がメイジだとわかったんですか？」

「んー、はつきりした確証はなかったんだけど、傷の治りが早い様な気がしたからね。内臓なんてそんなに簡単には治らないものなんだ、高位のメイジの治療でも受けない限りはね。あとは……勘、かな。」

「そうですね……あまり納得のいく答えではありませんがそれは置いておきます。では、メイジの前に、奇妙と付けた理由は？」

「一人旅をする子供のメイジなんてまずいないよ。少なくとも私は一度も見た事聞いた事もない。それでも家業の手伝いであちこち行っていたから、見聞は広い方だと思うけどね。付け加えるなら、8歳にしては妙に大人っぽいからかな。」

「それだけですか？」

「まあ、奇妙、なんて感覚的なものだからね。感じた事をそのまま言っただけだから、説明できるほど大した理由なんてないよ。」

少なくとも嘘はついていないようだ。

隠している事、話していない事はあるだろうけど。

奇妙っていうのが、魔法についての事でないのは助かった。

まあ、精神年齢については、前の世界を入れれば17、8歳なのだから外見年齢とのずれはしょうがないだろう。

アルセスさんの答えにすべて納得したわけではないが、監視者の情報は欲しい。

いくら感謝されると言われても、知らない人から見張られているのは薄気味悪い。

城の近くにこれだけの屋敷を構えている事から考えても、なかなかの規模を持つ商会なのだろうから、各地の情報を得る事も可能だろう。

いや、商会だからこそ、その手の情報には詳しい筈だ。

今一番欲しい監視者の情報と、これから必要な各地の情報。

上手く行動すればそれが手に入る可能性がある。

ある程度の危険を冒す価値はあるだろう。

僕の魔法の異常性に気がつかねければの話だが。

何処まで話すかが問題だな。

取り敢えず、系統魔法が使える事は話してもいいだろう。

こちらに無い魔法についてはすべて秘匿。

リングウェポンや魔石関係については……できるだけ隠しておこう。ディテクトマジックを使われれば、指輪や腕輪が魔力を帯びている事位はばれるだろうが、詳しい事までは判らない、筈。

あと気をつけておく事は……予備用の杖を必ず持ち歩く事。

魔法の同時行使の禁止ってとこかな。

ばれそうになったら逃げられるように、脱出ルートも確保しておかないと。

「わかりました。改めて自己紹介を。僕の名前はケイン。ケイン・ブリッグスです。先程はすいませんでした。レビテーションで運んだ方が、体に負担がないのは判っていたのですが……」

「いや、それは気にしないでいいよ。君にもいろいろ事情があるだろうしね。……得意な魔法は治癒かい？」

「ええ、一応水のドットです。」

「成程ね。」

系統については水という事にしておいた。

魔法で治療した事がばれているなら、別の系統だとは言えない。

水の系統なんてあんまり使えないのだがしょうがない。

この年でライン以上というのはかなり目立つだろうから、クラスはドット。

これは特に問題ないだろう。

実際ドットスペルしか使えないし。

「そう言えばなんであんなところで貴族に絡まれたんですか？」

「ああ、それかい。実は次の虚無の曜日が妻の誕生日でね、こっそりプレゼントを買って驚かせようと娘と計画してたんだ。こっちに

来て初めての誕生日だから、なにか珍しい物をとって探してんだが、よそ見していて貴族にぶつかっちゃってね。それからは君の見たとおりさ。」

「そうだったんですか。」

「まあ、大怪我はしたけど君のおかげで死なずに済んだし。本当ならあの場で殺される可能性だってあったわけだからね。君にはいくら感謝してもし足りないよ。」

「貴族が殺さなかったのは、僕が何かをしたわけじゃないので、別に感謝とかはどうでもいいんですが……もうちょつと危機感を持つた方がいいですよ。殺されそうだったんだ、あはは、なんて。」

「うーん、やっぱり君もそう思う？ いやあ、妻にもよく言われるんだよ。仕事中はしっかりしているのに、なんで私生活では抜けたところが多いの、とか。」

「奥さん苦労しているんでしょうね……」

そんな話を話していたら、荷車は屋敷の門に到着していた。

不審そうに荷車を眺めていた門番が、荷車に横たわるアルセスさんを認めた途端泡食って駆け寄る。

まあ、一晚帰ってこなかった自分の主人が荷車で帰ってきてたと思ったら、大怪我を負っていると一目でわかる状態なのだから無理もないだろう。

「わ、若旦那、一体どうなさったのですかそのお姿は。ああ君、ありがとう、これは礼だ、取っておいてくれ。」

そう言っって荷車を引いていた人に渡したのは20スウ。

僕が交渉したのは10スウだし、それは前金で既に払っているから御者も大喜びだ。

アルセスさんのところに来た門番は、傍に座っている僕が胡散臭そ

うに見えたのか、腰の剣に手を添えながらこちらを睨みつけてくる。

「ハンス、彼は僕の命の恩人だ、失礼のない様に。」

駆け寄ってきた門番はアルセスさんに声をかけられると、驚いてもう一度僕を見直す。

まあ、子供を命の恩人と紹介されてもリアクションに困るだろう。だからといって剣を向けられそうになるほど、胡散臭い恰好をしてはいない筈なんだが。

「すいませんが、お部屋の用意をお願いします、あと医者を呼んできてください。アルセスさんは私が運びますから。」

物言いたげな視線を無視し、そう門番に告げて、袋の中から小さな杖を取りだす。

アルセスさんには、もうメイジだとばれているから、魔法を使う事に特に抵抗はない。

レビテーションを唱えてアルセスさんを浮かせると、門番さんは納得したようにうなずき、案内の為に僕の前を歩き出す。

クラリスちゃんも家についた事で安心したのか、少し笑顔になっている。

迎えに出てきたメイドさんに抱かれて運ばれている。

最初は、怪我人を置いてすぐ帰るつもりだったけど、妙な視線について情報だけでも聞いておきたい。

一応危害は加えないとは言われたけど、やはり正体不明の視線は気になるから。

他の情報が手に入るかもしれないし。

## 第15話（後書き）

話が全然進まない……

宿から家につくのに一話かかるって……

展開遅くて申し訳ないです。

ゼロ魔原作まではまだかかりそうです。

次は一週間以内には上げるつもりです。

## 第16話（前書き）

えー、予定より遅くなりましたが、お盆だという事でご勘弁を。  
パソコンに触る暇がなかったんです。

## 第16話

### 第16話

玄関に入ったところで門番さんと別れ、メイドさんに案内されてアルセスさんの寝室に入った。

20畳ぐらいのかなり大きい部屋だが、余計な飾り物のあまりないシンプルな内装や家具。

大きめのベッドの脇にはおそらく医療メイジだろう、杖を持った人が待機していた。

胸の前で両手で杖を握りしめている女性は、水色の髪と緑の瞳を持つ、スタイルもいい美人なのだが顔色が青白く、アルセスさんより病人の様に見える。

一見ただけではどっちが病人か間違えてしまいそうだ。

……って、なんでメイジがもうここにいるの？

ゲルマニアの首府に支店を持つくらいなのだから、それなりの規模を持つ大きな商会だと思ったから、医者を呼んでくれと言われて医療メイジを呼ぶであろう事は判っていたつもりだったが、常雇出来るほどとは想像もしていなかった。

まあ、そんな事は後でもいい。

今はアルセスさんの治療を優先しよう。

ベッドまでレベテーションで運んだあと、治療の邪魔にならないように脇に下がる。

「だ、大丈夫ですか、あなた。今治しますから。」

そう言つて、薬を飲ませたり塗つたりした後呪文を唱える。  
治癒の魔法。

僕の使えるものとはケタ違いの効果。  
それほど強力なメイジには見えなかったので、さつき使つた薬で効果を増幅しているのかもしれない。

あれが噂に聞く水の秘薬というものだろうか？  
大変希少で高価な物らしいが、この効果なら納得である。

そう言えば、あなた、と言つていたな。  
という事はこの人はアルセスさんの奥さん？

……つて、奥さんがメイジ？  
アルセスさんつて一体何者なんだろう。

いくら大きい商会の人間とはいえ、ここがゲルマニアだといえ、そう簡単に平民がメイジを嫁に貰えるわけがない。  
ない筈なのに……

治療を終えて、すぐ話をするというわけにはいかなかった。  
僕としてはすぐ話をしたかったのだが、治療を終えたばかりの病人を問い詰めるのも問題があるだろうし、まずは家族との会話や休息の方が優先されるべきだから。

「それではこちらの部屋でおくつろぎください。御用の場合はそちらに置いてある鈴を鳴らしていただければ人が参ります。」

「わかりました。ありがとうございます。アルセスさんと話ができるようになったら呼んでもらえますか？あと、できれば地図や本なんかがあると嬉しいんだけど。」

「かしこまりました。後ほどお持ちいたします。」

案内してくれたメイドさんはそう言つて頭を下げると、部屋を出て行った。

さて、時間が空いてしまった。

初めて来た他人の屋敷でうろつきまわるわけにもいかないから、おとなしく部屋に籠ってなきゃいけないので、魔力運用訓練でもしていよう。

やるのはゆっくりとした動きをしながらの魔力運用。

太極拳の様にゆったりとした動きを、内息の調整をしながら行う。

これが案外楽なようで難しい。

コントロールがまだあまく乱れがちな魔力を繰り出す動きに合わせられないと、威力が乗らないのだ。

しばらくやったあと、目を閉じ、魔力の運用のみを行う。

結跏趺坐を組み、両手の平、足の裏、頭頂部を上に向け、体の中に流れる魔力を通り道に従ってゆっくりと流していく。

あくまでもゆっくりとした内息で体の調子を損なわないように。

以前、調子に乗って魔力を廻していたら、危うく暴走するところだった。

あの時の痛みは筆舌に尽くしがたいものがあつたので、もう二度と味わいたくはない。

そんな事をしていたら、気付いた時にはいつの間にか陽がおちようとしていた。

そして机の上には三冊の本。

どうやら、集中しすぎて人が部屋に入った事にも気付かなかつたらしい。

何をやっていたかまでは判らないだろうが、あまり人に見せてもいい姿でもない。

こつちの世界に結跏趺坐なんてないのだから……

おまけに、話しかけても返事はしなかっただろう事を考えれば、怪しまれているだろう事は想像に難くない。  
取り敢えず、独自の魔力鍛錬法という事で納得してもらうしかないな。

人が来るのがわかっていたのに、この体たらくとは……アルセスさんの事をとやかく言う前に、僕自身の意識改革をしなくては。

本を確認すると、ハルケギニア地図と物語が二つだった。

取り敢えず先に地図を開く事にする。

地名などは有名どころしか知らないの、ある程度の情報が必要だ。できるだけ詳しい地図だといいいんだが……

「なんだ、この地図は……」

あまりに稚拙な地図に、思わず声に出して呟いてしまった。

置いてあったそれは、地図とは銘打ってあるものの、中身は子供のお絵かきレベルとまではいかないが、明らかに精度の低そうなものだった。

確かに地名は判るが、国境や貴族の領境のあたりになると途端にあやふやになる。

江戸時代に書かれた地図に似ている。

そういえば、この世界では科学が発達していなかったな。

魔法万能の世界で、それ以外の学問がそうそう発達するわけもないか……

それでも、地名や都市などの情報は一応手に入った。

取り敢えず、毛皮の裏にできるだけ丁寧に映しておこう。

持ってきてもらった本は、『イーヴァルディの勇者』と『ブリミルの教え』か。

まずは『ブリミルの教え』から読んでみるとしよう。

読み始めて少しして、部屋の扉が控えめにノックされたのに気がついていた。

『どうぞ、開いてますよ。』

声をかけると、入ってきたのは先程この部屋に案内してくれたのは別のメイドさん。

食事の支度ができたらしく、一緒にいかがですかというアルセスさんの奥さんからの言伝を持ってきた。

アルセスさんの容体を聞きたい事もあるが、何よりほぼ一日ぶりの食事とあって快諾し、案内してもらって食堂まで行く。

「奥様、ケイン様をお連れいたしました。」

食堂の入り口で立ち止まったメイドさんが声をかけると、扉が内側から開かれていった。

勧められるがままに食堂に入ると、中にいたのはアルセスさんの奥さんとクラリスちゃん。

椅子に座らずに僕を迎えてくれた。

どうやら、僕が来るまで待っていてくれたらしい。

アルセスさんはまだ眠っているらしく、ここには姿を見せられないようだ。

大きなお屋敷でメイドさんを抱え、奥さんがメイジという事もあった、てつきり映画で見る様な中世貴族風の生活様式だと思っていたのだが、和やかな空気が漂っていた。

二十人ぐらいは一度に座れそうなテーブルなのだが、座っているのはわずか二人。

それともかなり近い位置に椅子がセットされており、料理の類も既に並んでいた。

豪華ではないが丁寧に作られていると一目でわかる料理の数々。

パンやシチューなどが並んでおり、食事作法にあまり詳しくない僕でも恥はかかないで済みそうだ。

多分、僕の事をアルセスさんから聞いていたのだろう。

命の恩人を迎えるにはあまりにも質素だが、それが過ぎるということ事もない。

貴族暮らしをした事のない僕にとってはありがたい心遣いだ。

正直、やたら豪華な食事を礼儀作法に気を使いながら、厳粛な空気の中で食べるのは拷問の様に思う。

そんな気配りがありがたかった。

「ケイン様、この度は夫を救っていただき、本当にありがとうございます。」

入ってきた僕にそう声をかけて頭を下げる奥さん。

横にいるクラリスちゃんも一緒に頭を下げている。

「いえ、たまたま通りがかっただけですし、大した事ができたわけでもないのですから。そこまで大げさに言われると、かえって緊張してしまいます。」

「そんな事はありません。一晩中看病していただき、あまつさえ魔法を使っていたいたのですから、これぐらいの礼は当然の事です。それに『グウー』……」

言いつのろうとした奥さんの言葉を遮ったのは、僕の腹の音だった。

昨日の夜簡単な夕食を取っただけで、それからほぼ丸一日何も入れてもらっていない胃袋が反乱を起こしたらしい。  
バツの悪い気持ちでうつむく僕を、クラリスちゃんが笑って見ていた。

「ママ、早くご飯食べよう。ケイお兄ちゃんもお腹がすいてるよ。」  
「……くすつ。そうね、難しい話は後にしましょう。それでは……  
ケイン様、どうぞ。」

## 第16話（後書き）

うん、まだ一日経ってないね。

超スローペースのおかげで原作突入がいつになるかは、作者自身わかりません。

プロットはあるんですけどね。

肉付けに苦戦しております。

一つお願いですが、評価をしていただけるのはありがたいのですが、できればその際に改善点などをあげていただけると助かります。

自分で自分の文章の欠点に気づくのはなかなか難しいので。

評価をされてもどこを直せばいいのかわからないものですから。

次話はいつになるかは、正直わかりません。

今週の予定もなかなかに厳しいものがありますから。

まあ、それでも時間がある時には進めていこうと思っておりますので、気長にお待ちいただければ、と思っております。

## 第17話（前書き）

すいません。

今回、時間的に厳しかった為、十分な推敲ができませんでした。

それでもよろしいという方はどうぞ。

## 第17話

### 第17話

食事を終えた僕は、アルセスさんの寝室に向かう事無く、与えられた客室に戻る事になった。

治療は順調にいつているとはいえ、かなりひどい怪我だったのだからしょうがない。

話はいつでもできるのだから、あせる必要もないだろう。

夕食の時、僕は一つの提案をしていた。

アルセスさんの治療に加わるという事。

対価は、ヒルダさん（アルセスさんの奥さんの名前）の魔法指導。

昨日の治療でヒルダさんの力が底をついているらしく、ある程度治っているとはいえ、容態が急変する可能性を考えると、やはり不安ではあるのだろう。

意外とあっさりと了解してくれた。

その方がやりやすい事は確かなのだが、順調に行き過ぎているような気もする。

僕に都合よく進み過ぎている事は確かだけれど、チャンスである事もまた事実。

元々この街に来たのは、大国の首府ならば魔法関係の本などに触れる機会が多いだろうというのも理由の一つだ。

本で読んでわかる知識だけではなく、直接魔法を教えてもらえるならば、願ってもないチャンスである事もまた事実。

不安が解消されたわけではないが、無料で魔法を習える機会などこの先あるとも思えない。

多少の危険を冒してでも、留まる理由としては十分だろう。

欲を言えばきりはないが、ヒルダさんは水のラインクラスのメイジ。もう少しクラスの高い人に教えてもらいたいが、無料で教えてもらうのにぜいたくは言えないだろう。

教えてもらえる事自体が僥倖と言ってもいいのだから。

そんな事もあって翌早朝、僕は今アルセスさんの治療をしている。一人で治療という事にはならず、ヒルダさんやメイドが数名僕の治療を見守っている。

人前でキュアやヒーリングを使うわけにもいかない以上、こちらの世界の魔法を使っている。

ドットスペルしか使えないので、効率はそれほど良くはないが、魔力運用訓練で増えた魔力量のおかげで、それなりの成果を上げる事は出来ている。

ラインスペルをぶつつけ本番で使うわけにもいかないのですが、ヒルダさんから教えてもらうのはアルセスさんの治療が終わった後になる。大切な旦那さんを実験体の様に使うわけにもいかないだろうから、しょうがない事ではあるし、僕自身ラインスペルが使えるかどうかは判らないのだからしょうがない。

そんなわけで体の方はかなりの速さで回復している。

それでもアルセスさんが寝込んでいるのには理由がある。

こっそり解析してみたが、昨日の移動が実はかなり堪えていたようで、体力というか精神的にかなり弱っていた。

手足の骨折、内臓のダメージならなんとかなのだが、さすがに疲弊しきった精神を治す方法はない為、安静にしているのが一番という事らしい。

ヒルダさんはラインクラスの水メイジだが、水の秘薬を惜しげもな

く使っていたので、昨日のような治癒ができたらしい。

さすがに疲労も激しかったようだが、大まかな治療は済んでいたもので、今日の治療は僕一人でも何とかなるレベルのものだった。

まあ、さすがに水の秘薬は使わせてはもらえなかったが、その必要もなかったのだからしょうがないだろう。

できれば水の秘薬を使った時の効果検証もしたかったのだが仕方がない。

幸いと言っでは何だが、体の方はほぼ治療が終了しているので、明日から魔法の事を教えてもらう事になった。

今日はヒルダさんが昨日の治療で疲れているので、ゆっくり休むという事になっている。

そうなると自室でゆっくり本でも読んで、と思っていたのだが、一人取り残された形になってしまったクラリスちゃんの遊び相手をして午後は潰れてしまった。

夕食を終え少し話をした後、クラリスちゃんを部屋まで送り、与えられた部屋に戻って本を読み、読み終わってから一時間ほど運用訓練をして眠る。

二日目はそんな感じで特に何事もなく過ぎていった。

三日目。

今日から、いよいよ待ちに待った魔法訓練の始まりである。

午前中は座学で呪文や、使い魔についての講義。

午後からは做った魔法を使ってみたのだが、魔力量に問題はないのだが、なぜかラインスペルは発動しなかった。

それでもラインスペルは覚えるだけは覚えたので、まあ良しとしよう。

アルセスさんはいまだに休養中。

謎の視線の事はいまだに聞く事が出来ない。

焦っても無駄なのは理解しているのだが、やはりじりじりとした焦燥感を覚えるのは仕方がない事だろう。

夕食後はクラリスちゃんと、まったり過ごす。

旅の途中の話などをしてあげると喜んでくれた。

#### 四日目

アルセスさんが大怪我をした事をどこから知ったのか、ゲルマニア皇室から使者が送られてきた。

高名な水メイジも一緒に来たが、既に治療する必要のない状態だったらしく、そのまま帰っていった。

治療の様子を見る事ができれば勉強になったのに残念だ。

もともと、どこの馬の骨とも判らぬ少年を部屋に入れてくれるとも思えないが。

公爵や侯爵、辺境伯など位の高い貴族からもお見舞いの品が使者と共に送られてきた。

殆どが水の秘薬や高級そうな食材などだったが。

アルセスさんの治療に使って在庫が底をついていたらしいが、おかげで以前より増えたそうだ。

使者との応答がある為、残念ながら今日の講義はすべて中止。

クラリスちゃんの遊び相手や読書、自己鍛錬などでその日は過ぎていった。

それにしても、皇室からも使者が来るなんて、アルセスさんは一体何者なんだろう。

ひょっとしたら、とんでもない人と知り合ってしまったのかもしれない。

五日目。

ようやくアルセスさんが目を覚ました。

早速お話、と言いたいところだが、ヒルダさんとクラリスちゃんが寝室に飛び込んでいたので、邪魔をしないよう待つ事にする。

そういうわけで一人でもできる自己流の鍛錬をやっている。

講義の方は、結局まだ一日しか受けていない。

まあ、ヒルダさんも忙しいのだから仕方ないと言えば仕方ないのだが。

それでも座学に使った魔法書などはそれなりに役に立った。

もっとも、ラインスペルはまだ使えなかったので呪文を覚えたただだし、ヒルダさんは水以外の系統はドットクラスが精いっぱいなので、実践に関してはあまり得るところはなかったが。

そんな事をしているうちに日が暮れ、夕食は一人で摂った。

アルセスさんは目が覚めたとはいえ、いきなりたくさん物を食べられる訳もないので病人食を。

クラリスちゃんが一緒に食べたいといって、家族三人で食べる事にしたらしい。

夕食後部屋に戻って借りた本を呼んでいると、部屋の扉がノックされた。

「ケイン様。アルセス様がお呼びです」

呼びに来てくれたのはいつものメイドさん。

さすがに目が覚めたばかりで呼ばれる事はないと思っていたので、その日のうちに呼ばれた事にびっくりした。

「わかりました。案内をお願いします」

読んでいた魔法書を置いて、メイドさんの後について歩く。

「アルセス様、ケイン様をお連れいたしました」

「……ああ、入ってもらってくれ」

「どうぞ、お入りください」

そう声をかけて寝室の大きな扉を開くメイドさん。僕が入ったのを確認してすぐに扉が閉められた。

「すまないね、遅くに」

「いえ、逆に今日呼ばれた事に驚いています。あれだけの怪我なので、すから、しばらく休養するのだばかり思っていました。体の調子は、どうですか？」

「怪我の事なら心配はいらないよ、君とヒルダのおかげで、すっかり元通りさ。まあ、十分休養はとらせてもらったからね」

「……あなた。そんな事言ってもまだ安静にしていってもらわなくては困りますよ。怪我で体力がおちているんですから」

ヒルダさんが少しむくれたような、あきれたような口調で口を挟んできた。

「……ま、まあ、そんなわけであまり長い話も出来ないのだけど、長い事ほっぴらかしにしまったからね。ちよつとは説明しておかないと不安だろうと思ってね。……君の気にしていた視線の事とか」

## 第17話（後書き）

なんか、いいところで切れてしまいましたね。

もうちょっと長く書きたかったのですが、今日はここまでで限界のようです。

次の更新は未定です。

リアルが忙しくなってきましたが、週一ペースぐらいで頑張っていければ、と思っています。

そういうわけで次回投稿日の予告はできません。

時間見つけて、ちょっとずつでも書いていくんで、ご容赦のほどを。出来上がりそうだったら、活動報告の方で告知だけはしておきますので。

## 第18話（前書き）

取り敢えずできたので投下します。

急いで作ったので文章的におかしなところがあると思います。  
気付いた方はご報告をお願いします。

## 第18話

### 第18話

「……君の気にしていた視線の事とかね」

そう言うと、真面目な表情になったアルセスさんは口調も雰囲気もがらりと変えて話した。

「まず断っておくが、すべてを君に話す事は出来ない。ただし、君に敵対する意思は持っていないので、その点は安心してもらって構わない。まあ、言葉だけで安心しろと言われても難しいだろうが、それはこれからの行動で証明しよう。すべてを明かす事が出来ないのにはわけがあるが、この場で言う事は出来ない。君には命を助けてもらった恩があるが、それで君のすべてを信用したわけではないからね。君とて私達に隠し事はしているだろうから、そのあたりは深く追求しなくてもいい。まず君が気にしていた視線に関してだが、あれは元々私の状況を逐次把握する為の物だ。物見の水晶と呼ばれるマジックアイテムを使ってね。だから当然気配などあるわけがない。何しろ術者本人は遠く離れた場所にいるのだから。そして、行動を逐一見張られているのだが、残念ながらこのマジックアイテムには欠点がある。距離に関しての制限はほぼないのだが、屋内に監視対象がいる場合その行動が見えない事、一度設定した後監視対象を移すには手間がかかり、簡単には出来ない事、そして、声は聞こえないし伝える事も出来ない事。それでも重宝しているのは、その他のマジックアイテムを使えばある程度はカバーできるからなのだが、生憎あの日の私は連絡用のアイテムを持たずに家を出てきたものでね」

「だから何度も言っているじゃありませんか。もうちょっと緊張感

を持つてください、と。ヴィンドボナに来てまだ日が浅いの、本国と同じようにふらふらするのはやめてください。ここであなたに何かあったら、私とクラリスはどうすればいいんですか……」

「ま、まあ、そういうわけで、君と会った時は助けを呼べるような状況ではなかったのだ。せめて意識があればなんとかあったのだがね。……話がそれたね、元に戻そう。私が大怪我をしたのは、恐らくだが私達の行動を気に入らない者がいるせいだろう。この国の上層部の要請でこの国に支店を作ったのだが、すべての人間が納得しているわけでもないし、自分の権益を侵される者もいるからね。そういう者にとって私は是が非でも排除したい対象というわけさ。今回の件に関しては死ななかっただけ運がいいと言わなければいけないだろうね。もっとも実行犯は死んだ方がましだと今頃思っているだろうが……そこまでは私も関与するところではない」

「すいません、ちょっといいですか？ 実行犯や黒幕はもう判っているのですか？」

「とつくに処罰を受けているだろうね。さっきも言った事だけど、私の行動は逐次見張られている。実行犯の事も当然見られているし、それがわかれば後はその人物を調べれば済む話なのだから。さっきも言ったように私達の商会はこの国から招聘を受けている。その商会の人間を殺そうとしたのだから、それ相応の処罰は受けてもらわなければね」

「じゃあ、あのお見舞いの品は……」

「ああ、皇帝閣下や、主だった大貴族からの物だろ。彼らだって国が招いた商会の人間が到着後まもなく殺されるなんて事になれば、これからの経済活動に支障をきたすのは判っているからね。口止め料は本店の方に送られているだろうし、こっちに送ってきたのが薬関係や栄養を採る為の食料だったのはそういうわけさ。何が何でも死んでほしくはなかったって事だからね。実行犯や黒幕に対する処罰というのも、お詫びの中には含まれているのは言うまでもないね。私も詳しくはまだ知らないのだが、そうなんだろう、ヒルダ？」

「ええ、実行犯は既に逮捕済み、黒幕はシャブニール侯爵です。こちらは既に捕縛の為に騎士団が向かっていますわ」

「そういうわけで、彼が大人しく捕まってくれば、それで事件は解決というわけさ。もっとも公式発表では謀反の企みありとか、そのあたりになるんだろうけどね」

「……ちよつと待つてください。まだ黒幕は捕まっていって言いましたよね。やけを起こした侯爵が特攻してきたらどうするんですか？」

「そんな心配はいらない。ここは城に近いし、周りの屋敷も協力者の大貴族のものばかり。衛士が巡回する様な場所で特攻してきたところで、返り討ちにあうのが関の山さ」

「さて、君に対する謝礼を考えなくてはいけないのだが、何か望みはあるかね。勿論実現可能な範囲での話だよ」

そう言われても、急には思いつかない。

治療の対価としてヒルダさんに魔法を教わる事になっているし。

それにしても、やはり詳しくは話してくれなかったか。

まあ、こちらにも隠している事があるのだから、隠し事をするなともいえない。

取り敢えず、アルセスさんを見守る人の視線という認識でいいか。僕に害をなすものではないのだから、気にはなるがこだわる必要もない。

全部を信じる事は出来ないが、今のところおかしいところはないし、話も矛盾してないのだから、こだわり過ぎると却って怪しまれる事にもなりかねない。

この事は、とりあえずこれで一段落ついたと考えてもいいだろう。

さて、今考えるべきは謝礼の事か……

「特には……考えついてからでいいですか？」

「まあ、それでもいいさ、ゆっくり考えてくれ」

「……ああ、そうだ、魔法関係の事についていろいろと聞きたいのですが」

「どんな事だい」

「魔法を使えないメイジの話聞いた事がありますか？」

「うーん。確かガリアのジョゼフ王が魔法を使えず、ついた二つ名が無能だった筈だが……」

ジョゼフ王か……

魔法を使えないのだったら、とは思うが、同年齢ではないからな……

「それではジョゼフ王の使い魔についての情報はありますか？」

「聞いた事無いね。魔法が使えないのだから使い魔も召喚できないんじゃないかな？王族はあまり使い魔を召喚しないし、してもあまり人前には出さないからね。それこそよほど強い使い魔でない限り」

そうか……

それじゃあ、使い魔の事なんてわかるわけないよな。

ジョゼフ王が使い魔を召喚していたとしても、確認する術はないという事か……

自分で言って確認するしかないか……

「ほかに？」

「心当たりはないね。ヒルダはどうだい？」

「すいません。私も心当たりは……」

「それでは、珍しい使い魔などの情報はありますか？」

「珍しいっていうとどういう物だい？」

「誰も見た事のない様なものとか……」

「……聞いた事ないね。ヒルダは？」

「そうですね、私が魔法学校に行っていた時に風竜を召喚した人はいましたが、それも珍しいってほどではないですね。強い使い魔ではあります……」

こっちも手掛かりなしか。

まあ、そう簡単に手掛かりなんて転がってるわけないしな。

「そうですね……それではお願いなのですが、珍しい使い魔や、魔法を使えないメイジ、あるいは変わった魔法を使うメイジの情報を集めてくれませんか？」

「ずいぶん変わった情報を欲しがるんだね。まあ、いいけど。それで、他には何かないのかな？」

「そうですね……今回お見舞いでもらった水の秘薬などを少し分けてくれませんか？」

「ああ、それなら構わない。そういえば君は水メイジだったね。どうせただでもらった物だ、好きなだけ持っていくといい」

「そうね、では私は魔法を教えるついでに秘薬の調合についても教えてあげましょう。この人も良くなった事だし、明日からはみっちり教えてあげますわ」

「ありがとうございます」

取り敢えずこれで情報についてはなんとかあったかな？

あとは……ジョゼフ王の使い魔の確認にガリアに行くかな？

インビジブルを使えば、誰にも見られる事もないだろうし。

……いや、待て。あせらずに考えよう

もし、ジョゼフ王が僕の予想通り虚無だった場合、どんな呪文を使ってくるかわからない。

魔法が使えないと聞いてはいるが、いつ使えるようになるのかはわからないのだし、どんな効果の呪文があるかも判らないのだから、ここは慎重にいくべきだろう。

予想ではそうそう簡単に虚無の魔法を使う事が出来るようになるとは思えないが、これは僕の勝手な予想で、当たっているかを確認する術は今のところないのだから。

あるかどうかはわからないが、万が一他人の魔法効果を無効化する魔法があつたら、残るのは8歳の子供一人。

ある程度鍛えているとはいえ、専門に鍛えている人に出会つたら、あつてなくやられてしまうだろう。

王城に忍び込む事になるのなら、それなりの力をつけてからでないと。

物語の開始まであと7年。

やる事は山積みで、決して長い時間ではない。

取り敢えず、どんな状況でも生き残れるだけの力を身につける事を第一目標にしよう。

これからどんな物語が始まるかは判らないが、鍛えて無駄になる事だけはないだろうから。

## 第18話（後書き）

前回の投稿から2週間。

えらい時間がかかった割に、できたのは作者にもよくわからない代物。

実は予定では今回でアルセスさん達には退場してもらおう予定だったのですが……

次の投稿は完全に未定です。

これからまた忙しくなるのですが、時間を見つけて書いていきますので、のんびり気長にお待ちください。

## 第19話（前書き）

予想以上に指が動いたので、投稿します。

これでとりあえず、ウィンドボナでの話は終了かな。

## 第19話

### 第19話

あれから3ヶ月たった。

ヒルダさんは約束通りあの後みっちり魔法と秘薬の調合について教えてくれた。

元々体の丈夫な人ではないらしく、教えてくれるのは座学がメインであり、実技はごくたまに、それも調子のいい時だけだったが、治癒の呪文に関してはかなり上達したと思う。

なにしろ2、3日に一回はヒルダさんに治癒をかけていたのだからおかげで水だけは何んとかラインに上がる事ができた。

他の系統はまだドットだし、一番習得したかった練金はいまだに進歩がないけれど。

そういえば、欲しかった杖剣が手に入った。

なんでも何とかという名工の作で、固定化もかかっているらしい。名工の作ではあるのだが、杖剣と言うには少々小さいので買い手がつかなかったらしく、本店の倉庫に長い事眠っていたそうだ。

アルセスさんが僕の使っている棍棒のような杖を見て、わざわざ本店から取り寄せてくれた。

勿論、ありがたく受け取って杖としての契約も終わっている。

もっともメインで使うのは棍があるので、せいぜいメイズとしての身分証明にしか使わないだろう。

森の中を歩くのにマントというわけにもいかないし。

第一ヒルダさんは剣を使わないので、習う人がいない。

それにこれ以上身長が伸びたら、剣というより大型のナイフという

のが相応しいような大きさだ。  
まあ、見た目に杖とわかるので、訓練や街に出る時はありがたく携帯させてもらっている。

講義に関してだが、取り敢えず、できない魔法も含めてヒルダさんが知る限りの呪文、そして調べる事のできたものに関してはずべて教えてもらえた。

僕の使えない呪文でも、相手が唱えていたらその効果が判断できるのだから、決して無駄にはならない。  
そのうち使えるようになるばいいのだが……

そういえば、ヒルダさんの体について、一度何故根本的な治療に入らないのかを聞いた事がある。

あの事件で秘薬の類ならたくさん貰っているのだし、皇帝や大貴族とのつながりもあるのだから、高名な水メイジに頼んで治療してもらう事は決して不可能ではない。

それなのにあれだけある水の秘薬も使っていないし、特別な治療を受けているわけでもない。

第一、治療を受けるお金がないわけでもない。

「なぜ治療しないんですか？」

「なんの？」

「ヒルダさんの事ですょ」

「……ああ、ヒルダは別に病気ではないからね。治療の必要がないのさ」

「そんなわけないじゃないですか、あれだけ体が弱いのに……」

「詳しく話す事は出来ないけどね、ヒルダの事は病気じゃないって事で納得してくれないかな？」

「……すいません。なんか立ち入った事によくわかりもしないのに口出ししてしまって」

「いや、心配してくれたんだから、謝る必要はないよ。すまないね、却って気を悪くさせてしまった」

そんなわけで、わかったのはヒルダさんの体については何か訳ありらしいという事と、未だにすべてを明らかにされるほど信用されているわけではないという事。

まあ、こちらがいろいろ隠し事をしているのだから、向こうにされても怒れる筋合いではないしな。

病気じゃないのなら、収納リングに入っている薬で治せるかどうかも判らないし。

この件については忘れる事にしよう。

ジョゼフ王の使い魔の確認にガリアに行こうと思ったが、よく考えてみなくても相手は一国の王。

当然ながら王宮深くに居住している筈だし、その警備はガリア国内でも指折りの腕利きがしているとみて間違いないだろう。

そうになると、今の實力ではいささかどころではなく心許ない。

インビジブルや、気配遮断で対応できない状況がある場合、頼りになるのは僕自身の力のみ。

促進系の魔石のおかげでそれなりの地力についているし、そう簡単に負けるつもりはないが、それはあくまで一対一の状況での話。発見された時に追っ手が一人なんて事はまずないだろうし。

まずはどんな状況でも確実に逃げる事の出来る實力をつけなければ、ガリアの王宮に潜り込めても人生終了になりかねない。

ただ、これ以上狩猟で経験を稼ぐのも効率が悪すぎる。

もっと強い相手と戦わなくてはこれ以上の成長は難しいだろう。

もっと強い相手……

傭兵？

却下だ。

戦闘に巻き込まれたくはないし、人を殺す度胸はない。

第一、人に見せられる魔法ではない。

異端指定されたら、ハルケギニア中が敵になってしまう。

メイジに師事？

うーん、秘密を守る人ならいいかもしれないが、少なくとも今現在そんな知り合いはいない。

アルセスさんに紹介してもらっても、さすがに授業料まで払ってもらうわけにはいかないし……

持っている金になりそうな物は、リングや魔石、秘薬関係。

リングや魔石はある程度余っているから売ってもいいのだが、適当に売ると後々とんでもない事になりかねない。

秘薬関係についても、こちらの世界の秘薬はともかく、グローランサー世界の秘薬は出来るだけ隠しておきたい。

死者蘇生できる秘薬とかは買い手も多そうだが、異端指定も確実にし、それ以外でもこちらにはない効果の物が多いから、下手に貴族の注目を集めると厄介な事になりそうだ。

数が少ない上に、二度と手に入らないのだから、よほどの事がない限り人前に出したくはない。

武術家？

ハルケギニアにいるかどうか判らない。

サハラ超えて東方までいけばひょっとしたらいるかもしれないが……

サハラといえば、エルフがいたな？

強さ的には問題ないだろうが、人を嫌っているようだからまず無理だろう。

あとは……幻獣や亜人？

狩猟と似たような状況だが、恐らく強さは桁違い。

下手に竜などと遭遇したら、こちらが狩られる立場になるだろう。

取り敢えず、ゴブリンやオークを相手にすればそれなりに、かな？  
多対一の戦いになるだろうし。

無理な報酬を払わないで済む、秘密を守れるメイジや傭兵、武術家がいればいいのだが、そんな都合のいい存在が、そうそう見つかるわけもないだろう。

誰かに教わる事が出来ないのが、これほど足枷になるとは……

取り敢えずゴブリンやオーク相手に戦って、経験を積む事から始めよう。

「アルセスさん、ハルケギニアでゴブリンやオークが集中して住んでいる所つてあります？」

「そんなものを聞いてどうするんだい？」

「ずいぶん長い事お世話になりましたし、魔法の講義も一通り終わったので旅を再開しようと思ったのですが、むやみに歩き回ってオークの巣にでも迷い込んだら大変なので」

嘘である。

本当は場所を聞いたらそこに行こうというのだから。

「そうか……寂しくなるね。君にはクラリスもよくなついていたから、悲しむだろうなあ」

「別にこれが永のお別れというわけではありませんし。それにたまには寄らせてもらおうと思ってますよ、御迷惑でなければ、ですが」

「そうか、それならいいんだが。ところで情報の方はどうする？こちらに顔を出した時に伝えるという事でいいのかな？」

「……そうですね、それでお願いします」

情報がすぐに手に入らないのは痛い、どの道ここに留まっていたもやれる事は殆ど残っていない。

第一、商人の情報網は広いとはいえ、この世界の伝達速度を考えるとそれほど情報に新鮮さはないのである。

商売に関する情報ではないのだし、すぐに役立てなきゃ手遅れになる様な情報でもないのだから。

そうすると、ここに残っている理由はないのだ。

「そうだね、ちょっと待ってくれ……えーと……ああ、これこれ」

そう言つてアルセスさんが本棚から取り出したのは、この家に来たばかりの時に見せてもらったのよりも大きな地図。

おそらくルートなどが書き込まれているのであろう、町から町へ、国から国へ線が細かく書かれていた。

「これを見てもらえばわかると思うのだけど、ことと、ことと、ことと、ここ。このあたりは昔から亜人の被害が多い場所なんだ。普通なら森に入らなければまず出会う事はないんだけど、君は狩をしながら旅を続けるのだから？少し遠回りになつても、ここら辺りには近寄らない方がいいよ。あとは……こととここ。亜人もすんでいるけど、その奥にはそれ以上に強い幻獣などがあると言われていた場所だ。間違つてもここには入り込まないように。あとは、言うまでもない事だが、エルフの住むサハラかな」

成程。

「それで、いつ出発するんだい？」

「そうですね、すぐにでも、と言いたところですが、いろいろ準備が必要だと思つので三日後つてところですね」

「そうか……必要な物があつたら遠慮なく言ってくれよ」

「いえ、こちらに来てからは１ドニエたりとも使っていませんので、十分手持ちで間に合います」

実際、アルセスさんの家に住ませてもらっている間、お金が出ていくような事はなかった。

秘薬の材料費すら向こう持ちだったのだから、これ以上望めば罰が当たる。

そんなわけで、ヴィンドボナに着いた時に売り払った毛皮の代金や、巾着に入れていたお金がそっくりそのまま残っているのだ。

ちなみに本も数冊貰つてある。

ブリミルについての本が一冊。

幻獣・亜人についての本が一冊。

イーヴァルデイの勇者が一冊。

魔法に関しての本が一冊。

常に手元に持っている量にしては十分だろう。

収納リングの事を言っていないのだから、これ以上持てば邪魔になつてしょうがないのだし。

そうして、残りの三日間クラリスちゃんと遊んだり、必要な物を買ひ揃えるなどして過ごした。

## 第19話（後書き）

やっとこ旅に出てくれました。

次話からは亜人と戦ったりする予定？

まあ、そこまでいくかどうかはわかりませんが。

とりあえず読んでくれる皆さんにお聞きますが、主人公に武術もしくは魔法の師をつけた方がいいでしょうか？

メインが棍と素手なので、武術の方はハルケギニアで探すのが難しいのですが。

原作キャラかオリジナルキャラか、はたまた師匠なんぞは要らないか。率直な意見を頂けると助かります。

ちなみにオリジナルキャラの場合は中国系にするつもりです。

それでは。

申し訳ありませんが、次回更新予定は未定です。

## 第20話（前書き）

睡眠が足りなくて、テンパッテいる時ほど指が動くのはなぜだろう？

今度から、特技の項目に自動書記とでも書いておこうかな……

今回はコボルトとの戦い。

まあ、戦闘描写なんてないけど……

それにしても、記憶がない状態で書いた方が文章が長くなるのはど  
ういうわけだ……

## 第20話

### 第20話

お世話になったアルセスさんのお屋敷を離れて、早半年。

僕が今いるのは、ゲルマニアとトリステインの国境にほど近い深い森の中。

事前に聞いていた情報に従って、まずは亜人の中でも弱いと目されるコボルトと戦おうと思ってここまで来ていた。

ただ、問題が一つ。

倒すのは容易いのだが、それはあくまでも一対一の状況、もしくは魔法を使った状況においての事である。

コボルトは通常群れをなしている。

一匹見れば三十匹、とまではいかないが、十匹はいるのだ。

対するこちらは一人しかいない以上、手数に言えば、今の僕では勝ち目はない。

同時に複数をあしらう技量がない以上、どうしても各個撃破できる状況を用意するしかないのである。

そして、それだけの状況を用意するのが予想以上に難しい。

事前に罠などを張り巡らせればなんとかなるのだが、その時間が無い場合は？

当然の事ながら多対一の戦いを余儀なくされる。

幸い、コボルトはまず魔法を使えない。

使えるものもいるとは聞いたが、少なくとも僕はまだ遭った事がない。

運が良かったのか、鍛えた成果か、足の速さに関して言えば僕の方が上回っている。

道なき森の中を駆け回って、相手を引き離しながら程良くばらけたところで各個撃破。

それが魔法を使わずに、今採り得る最高の戦術。

その為に必要なのは、一撃の重さと手数。

ばらけているとはいえ、倒すのに時間をかければ多対一の状況におかれてしまうのだから、できるだけ速やかに相手を無力化する必要がある。

ここで問題となったのは、僕の主武器、棍の長さ。

一撃を入れるだけならできる。

だが、振り回すのには向かないのだ。

特にこんな鬱蒼と茂った森の中では。

今まで狩猟で使ってこれたのは、あくまでも待ち伏せがメインだったから。

面と向かって戦う場合でも、それなりに振り回す空間がある時に限っていた。

何より相手は集団で襲って来るわけではなく、倒す時間の事などを気にしないでいられたのが大きい。

多少狭くても、闘いながら広めの場所に相手を誘導できればそれによかったのだ。

だが、多対一で開けた空間で戦う事は、メリットよりデメリットの方が大きい。

こちらにも思っ存分得物を振り回す事は出来るが、それは相手も同じ事。

それに加えて弓矢や投げ槍、投石などを使える状況を提供する事になる。

そして、遮蔽物がない状況での多数相手の戦闘を強いられる事を意味するのだから、実力差が大きくなければ使える戦法ではないのだ。

そして、今の僕にはそれほどの実力はない。

今までとは違う戦い方に苦勞しながらも、僕はコボルト相手の鍛錬を積んでいた。

コボルトが5、6匹徘徊しているところでワザと音をたててこちらに気づかせる。

焦ったふりをして慌てて逃げ出し、相手を誘う。

獣道すら殆どなく薄暗い森の中を、蛇行しながら走り回る。

走力では上回っているのに、追いつかれる事はないが、逆に引き離し過ぎてもしけないので、たまに後ろを確認しながら走る。

そうして程良くばらけると、コボルトと一対一の戦いに持ち込む。

まず使うのは杖剣。

ブレイドを纏わせて長さを調節して、一撃を中てる事が目的。

ここで倒せればいいが、倒せなくても何らかのダメージを負わせる事ができればそれでいい。

怪我をしてひるむ様な知性の持ち主ではないが、怪我をすれば動きは確実に鈍る。

僕を追いかけていたコボルトは、急に方向転換して迫ってきた事に反応するが、勢いのついた体は急には止まらない。

狙い通り、僕のブレイドは相手の左肩を斬り裂く。

これで終わるほどやわな生命力の持ち主ではないが、左手は既に使えなくなっただろう。

杖剣をしまって懷に潜り込み、素手による連打を関節に集中させ、相手の行動を奪う。

魔力内功を籠めた拳で相手の肘や肩を狙ったの連打。

打ち方は何の変哲もないものだが、籠められた魔力が防具の上からでも体内にダメージを与える。

半年前までは例え考えても出来なかった戦い方ができるようになったのは、魔力内功の修練が実を結び、心臓と喉元の関門を突破できた事によって、戦闘中にも魔力内功をある程度使えるようになった事が大きい。

全身に廻らす事は出来なくとも、拳に集中して攻撃力を上げたり、足に集中して走力を上げる事などの部分的な使用が出来るようになったのだ。

今のところはどちらかにしかできないが、いずれ同時に行使できるようになるだろう、

相手の武器をかわし、あるいは弾いて一気に懷に飛び込み、魔力を纏わせた拳で腕や肩の関節を破壊する。

今回の場合は左に回り込む事で、相手の武器の攻撃範囲外からの攻撃となった。

最後のとどめは棍、もしくは魔法となる。

ちなみにこれだと止めを刺すのは、戦闘後の戦利品目当てである事は言うまでもないだろう。

たいていレベル1か2の弱い魔石だが、強い個体の場合まれにレベル3の魔石を落とすのだ。

魔法でとどめをさす場合、使うのはグローランサーの魔法がメインである。

相手に密着した状態で放つことから、それほど強い魔法でなくとも十分に事足りる。

棍での直接攻撃の場合は、特技の強奪が発動する事もある。

今回の場合はいったん距離を取って棍を呼びだし、勢いをつけて飛び込んでの攻撃。

周囲の木が邪魔をして、棍を振り回す空間がないのだから、仕方が

ない。

痛みで開いた口に突きこんだ棍は、そのままの勢いで後頭部から飛び出した。

エグイ光景だが、既にこの程度の光景は幾度も見ている。

素早く引き抜き、血塗れの棍を腕輪に戻すと、死体となったコボルトの側に転がったリングを一瞥する。

残念ながら強奪は発動しなかったようだ。

仲間をやられ、怒り心頭で周囲から迫ってくるコボルトの攻撃を避けて、再び走り出す。

この森に来たばかりの頃に比べれば、かなり危な気なくなってきたと自分でも思う。

最初にコボルトと戦った時には、正直生きた心地がしなかった。

倒すどころか、わき目も振らず一目散に逃げ出す事しかできなかったのだから。

あの時は何度も追いつかれ、攻撃を受けながらも必死で逃げ回っていた。

一対一の戦いなら熊とだってやった経験はある。

いくらコボルトといえど一対一なら勝てる、そう思っていた数刻前の自分を罵り殺したい気分で、逃げ回るしかできなかったのだ。

実際に遭遇した時には一対一の状況など作れもしなかったのだから。

予想以上の森の歩きにくさと暗さ、そしてコボルトの素早さ。

昼でもなお薄暗い森は、下草が腰の高さほどあり、歩くだけで体力がへっていったし、その時点でのコボルトの足は、僕よりも速く、

振り切る事などよほど運が良くない限り不可能だった。

歩きにくさに閉口しながらも、なんとかコボルトを発見して、どうやって倒そうかと考えていた時に、突然後ろから襲われたのだ。殆ど音もなしに降ってきた攻撃を避けたのは、運が良かったからとしか言いようがない。

攻撃に全く気付いてなかったのだから。

そして慌てて向き直り、気付いた時には5匹のコボルトに囲まれていた。

魔法を使って逃げようにも、詠唱する暇もなく対処におわれ、全周囲攻撃は障害物が多くて使えない。

ならば、とダッシュで逃げようにも、これだけ障害物に囲まれていては逃げ切る前に効果が切れてしまう。

体当たりで突破しようにも子供の僕よりはるかに体格がよく、逆に跳ね飛ばされる始末。

逃げだせたのは、追い詰められた僕がたまたま2回連続で攻撃を分身で避けた事と、その際に足止め攻撃でカウンターできたから。

足止めされた2匹が邪魔で追いかけるのが遅れなければ、おそらく僕はあのまま死んでいただろう。

何とか逃げ切った時には、全身打撲と疲労で一步も動けない状態だった。

この時も、リジェネレートで体力を回復している間に攻撃されれば、間違いなく死んでいただろう。

そして、手痛い教訓をもらった僕はその日からしばらくの間、忍び歩きとダッシュ、夜目を敵がいようがいまいがお構いなしにひたすら発動していた。

リングや魔石の入手を狙う場合、系統魔法を使用する事に関しては問題ないのだが、杖として使う媒体はグローランサーの腕輪でなければならぬ。

幾度か杖剣や杖で何度か系統魔法を使つてとどめを刺した事があるが、なにも出なかった。

腕輪を媒体にした場合は、しっかりと戦利品が出た事を考えれば、おそらくグローランサー世界のものを何らかの形で使わない場合、戦利品を得る事は叶わないのだろう。

今まで系統魔法でとどめを刺す事などなかったからすっかり忘れていたが、確か神様もそう言っていた筈。

ブレイドで手傷を負わせ、拳法で行動を止め、棍もしくは魔法でとどめを刺す。

一体あたりの必要時間は約十秒。

ある程度ばらけないと、とてもではないが使える戦法ではない。

一ヶ月の試行錯誤によって生みだす事のできた戦闘法ではあるが、欠点も当然ながら存在する。

一々武器を持ちかえる必要があるのだから、その間無防備になるのは避けられないし、続けて戦う事も出来ないので、確実に一対一の状況にしなければ使えない。

それに、倒しきれずに救援が来た場合の事を考えると、最低でもコボルトを一撃で倒せるようにならなければ、とてもではないがオークなどの相手は出来ない。

初手の一撃で倒す手段は、今のところ協力魔法のうち単体攻撃魔法であるイラプション（ファイアアロー＋サンドショット）、サンドガッシュ（アイスバレット＋サンドショット）、ソウルフォース（

ファイアアロー＋アイスバレット)のどれかを魔法強化をしてレベル2で唱えれば、ぎりぎりではあるが倒せる事は確認してある。(攻撃魔法は現在レベル2が限界であり、通常2人で唱えるものを1人で同時に詠唱しなければならぬ＋魔法強化に依る魔力消費量の増大という問題もある。)

もつと強力で、多数を同時に対象に取れる魔法もあるが、派手すぎて人目がない森の中とはいえ使えるものではない。

武器の場合、アタックレベル3＋強打撃＋バーサーカーの使用により一撃で倒す事は可能ではあるだろうが、バーサーカーによる反動で自分もダメージを受けてしまうのでは、それに続く戦いに生き残れるとも思えない。

即死攻撃は確率に頼らなければいけないので、安定した効果は望めない。

ただし、魔法で倒した場合、最大魔力の約50%を一回の攻撃で持つていかれるので、集団を相手にしなければならない場合、自殺行為としか言いようがない。

腕輪や促進系魔石のおかげで効率的な能力アップができていたとはいえ、僕の持っている魔力量は元々が大量ではないし、成長率もあまり高くないのだ。(神様に魔法を扱えるようにしてもらったとはいえ、元々魔法のない世界から来たのだから当然だろう。ちなみに成長率はレベルが上がった時に、魔法を限界まで撃って確認してある。)

それでもこの年齢にしては基礎能力が高いとは言えるが、あくまでも他の同年齢の子供と比べての話なので、普通に大人と比べたら勝ち目などあるわけがない。

なにより魔力内功は体内の魔力の運用法であるのだから、不用意に減らしたらそれだけ効果も落ちるのだ。

そういうわけで、最大魔力の50%を消費する魔法攻撃など、当然の事ではあるが簡単にほいほいと使える手段ではないのだ。

つまり、なんとかして棍、拳法による一撃必殺の術を身につけない限りコボルトとの多対一の戦いは厳しいものがあるし、オークと戦うのは自殺行為という事。

あと5年もあれば基礎能力だけで何とかなるとは思うが、5年もここに籠っていられるわけでもない。

あと3年以内にはオークやトロール、オグルの集団相手にそれなりに戦えるようになってるのが目標なのだから。

そしてその程度の実力がなければ、ガリアの王城に忍び込んで生還するなど夢のまた夢であろう。

幸いと言っては何だが、命懸けの戦いのおかげで魔力内功については戦闘中でもある程度は使えるようになったので、更に修行を積んで全力で運用できるようになれば、腕力などの基本的なものに関してはまず負ける事はないだろう。

戦いながら魔法を唱える技量を持っていない以上、どうしても攻撃手段が直接戦闘に偏ってしまうのは仕方のない事ではある。

仕方のない事ではあるのだが、それで魔法を諦めるわけにもいい。

ここでの修行の内容は、まずは魔力内功を戦闘中でも完全に運用できるようになる事。

そして、棍、または拳法での基礎攻撃力の増強。

最後に、戦いながら魔法を唱えられるようになる事。

期限は11歳になるまで。

目標はコボルトの集団を逃げ回らずに正面から倒すだけの実力を身につける事。

そう心に決めて、ぼくは再び修業を開始するのだった。

## 第20話（後書き）

前回読者の皆さんにお聞きした師匠の件に関しては、出そうか出すまいかを迷っています。

ホント、どうしよう……

人に散々意見聞いているのにこの体たらく。

まあ、出すにせよ、出さないにせよ、何とかケインには頑張ってもらう予定です。

それでは、ここまで駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

## 第21話（前書き）

やっとこ書けた……

今回は自動書記は使っていません。

修行はいったん終了。

まあ、日常生活でもできるので、いついつとやっではいきますが。

## 第21話

### 第21話

この世界に来て今日でちょうど6年。

身長もかなり伸びて、多分160センチ以上あるだろう。

運動、というか修行ばかりしていたので体の方もかなり鍛えられてきたし、筋肉もついてはいる。

筋骨隆々というわけでもないが、必要な場所に必要なだけ筋肉のついたバランスの良い体だと思う。

特技や魔法、スキルなどもレベル3程度までは使えるようになったし、常時付けていた促進系魔石のおかげで、大人にも負けない基礎能力を手に入れる事が出来た。

まあ、そうはいつでも騎士などに勝てるかどうかはわからないのだが。

よほど強い人じゃない限り、逃げる事は可能だろう。

それに、そんなに強い人ならかなり有名だろうし、物語に何らかの形でかわっている可能性も高いのだから、そもそも近づこうとはあまり思わない。

そして、ここ数年力を入れて鍛えていた魔力内功だが。

頭部の天頂の関門を突破した事によって、戦闘時にも常時運用できるようになった。

あと残っているのは、尾骨の関門。

こここの関門が開かない限り、体内で魔力が循環しないのだ。

僕が中国の気功を元に鍛錬したこの魔力内功は、体内で循環させる事によってその力を発揮する。

人体にある陽の性質を持つ八大正脈、陰の性質を持つ八大奇脈と名付けた魔力の通り道を通す事によって、身体強化や魔力を流し込むなどの効果を発揮させるわけだが、現在のところ、正奇両脈を流れる魔力功は互いに交わらずにそれぞれの属性の脈しか通っていない。つまり、現在僕の使用している魔力内功は同時に二つの魔力功を操っている状態なのだが、これが予想以上に手間取る原因となっている。

同時に二つの流れを操作する事は非常に難しく、天頂の関門を突破するまで戦闘中の操作が不安定だったのもその所為だ。

そして、尾骨の関門は、正奇両脈が最も近づく関門。

膜一枚程度の隔たりしかないのだが、その膜が異常に固いのである。おそらく両面から性質の異なる魔力をぶつけられた事によって、硬化してしまったのだろう。

それでも最近は少し柔らかくなってきたような気がするが、硬度が多少落ちたところで結局は硬いままだ。

絶えず魔力功をぶつける事によって、硬化を上回る速度で軟化させていくしか方法はないのだが、これが非常に痛みを伴う方法なのである。

神経に炎や氷で出来た錐を捻じ込んで、穴を開けようとしている、と言ったらしいのだろうか？

尋常ではない痛みを伴う。

その痛みに耐えながら少しずつ削っていくのだが、当然ながら、それほど長い時間持つわけがない。

最初にやった時は、二三度押しあてた程度で、30秒も持たずにダウンした。

今でも一回に出来るのは10分が限界。

倒れるまでやっても、何もしない間に修復されてしまうので、こまめにやった方が効率的にはいいのである。

少しずつ、インターバルを開けて削った方が、修復にかかる時間が

短くて済む。

勿論一気に穴を開けてしまえるのならば、それが一番いいのだが、そんなに物事は上手くいかないものだ。

元々が僕の知識を基に試行錯誤で取り組んでいるもの。

効率が悪かるうが、それを実行にうつせるだけでもありがたいと思わねば……

そんなわけで最後の関門を突破するのにはまだ数年はかかりそうだ。秘薬で何とかできないかとも思ったが、さすがにこんなでたらめな事に対応している秘薬なんて、少なくともこの世界には存在していない。

元々がこの世界にはない事をやっているのだから、それも当然だろう。

ヒルダさんに教えてもらった秘薬の知識の中には、魔力回復のものすらなかった。

こうなると、現在リングに入っている、魔力回復の薬もかなり希少価値が高いだろうし、これから先似たような効果の物が手に入るまでは使用を控えた方が無難だろう。

まあ、秘薬に関しては、時間のある時に自分で研究してみよう。

アイテム関係についてはどれもこれも、ほぼ人前に出せない。

少なくとも似たような効果の物が確認できるか、同じ効果の秘薬を作り出せるか、どちらかが達成できない限り、後々厄介事に巻き込まれる可能性は高いだろう。

リング、魔石関係に関しては言わずもがな。

これから先どうなるかなんて全くわからないが、戦争が起こったとして、敵を強化してしまう可能性すらあるのだから、これも人前に曝せる代物ではなさそうだ。

まあ、最低レベルのリングにレベル1の魔石程度では、それほど大した事にはならないだろうが、用心が必要な事に変わりはない。死ぬ筈の人の最期の時が伸びて手当が間にあったなんて状況になったら、うっかりでは済まされない。

少なくともメイジや貴族に渡せるような物じゃないのだが、かといって商人に売り払えるような物でもない。

売るとすれば、効果の面からそれなりの値段がつく事は簡単に予想できるが、それだけの物を買える人はよほどのお金持ちしかあり得ない。

間違ってもエキユー金貨数十枚なんて値段ではないのだから。

最低ランクのリングにレベル1の魔石を1個つけただけの物でも数百エキユーはするだろうし、3個つけた物や、レベル3の魔石をつけた物なら数千、いや数万しても全くおかしくはないだろう。

レベル1や2程度の魔石でも、身につけただけで、魔法抵抗力が上がったり、魔力消費量が抑えられるのだから。

それより強力なレベル3の物だと、今持っている物だけでも薬師の知恵、復活の秘儀、瞑想+1、再生能力+2、隠密など、かなりヤバイ効果を持つ代物があるのだ。

例えば、薬師の知恵だと回復アイテムの効果が1.5倍になるから、治療メイジには垂涎の的になるだろう。

復活の秘儀だと、死んでも生き返る可能性がある。

確率としては30%程度で大した事はないだろうが、発動したらとんでもない騒ぎになるのは避けられないだろうし、僕がそれを持っていたなどばれた暁には、間違いなく異端認定されてしまう。

これはどうやっても売る事は出来ないだろうし、持っている事がばれたらまずい代物の代表でもある。

瞑想+1なら、わずかではあるが嵌めているだけで魔力が回復して

いくし、再生能力+2なら体力がかなり回復していく。

しかも常時発動しているにもかかわらず、発動自体に魔力を必要としているわけでもない。

手に入れたと思う人は多いだろうが、先程も考えたように、それで死ぬ筈の人が死なないという結果も簡単に起こりうるし、逆の結果も起こりうる。

簡単に手放す事は出来ない。

隠密は、この前やっと1個だけ手に入った。

効果は敵との遭遇確率減少。

これはガリアの王宮に忍び込む為に僕が使おうと思っているので勿論手放す気はないし、こんなに暗殺向きの物売っていいとも思わない。

これとインビジブルを組み合わせれば、まずよほどの事がない限り発見される事はないだろう。

もともと、まだよくわからない虚無の魔法もあるし、僕の知らない魔導具などもあるだろうから、決して油断できるわけでもないが。

そう考えると、以前考えた資金の入手方法は殆ど使えない。

まあ、これもヒルダさんのおかげなのだが、薬草などの知識も増えたのでそれほど苦労はしないだろう。

少なくとも、以前のように毛皮と肉しか売る物がない、という事はない。

まあ、ここ数年修行に忙しかったので、売るほどの物がそれほどないという現実もあるのだが……

自分に出した課題のコボルト相手の集団戦も、数日前にクリアできた。

遠距離からの投石や、中距離からの長物、近距離からの剣や棍棒などの対処におわれる事もあったが、慌てずに攻撃を捌いて反撃でき

たので、戦闘能力に関しては最低限のものは持っていると判断した。少なくとも手も足も出ずに殺される事はないだろう。

もつとも、この前アルセスさんのところに行った時に聞いた、烈風カリンとかいう人にはとてもではないが勝てる気がしないが。

なんでも、竜を1人で倒せるとか、1人で軍隊の相手が出来るとか、エルフと引き分けたとか、戦艦をブレイドで斬ったとか、とにかく色々な武勇伝を持つ人らしい。

風のメイジだそうで、遍在も勿論使えるし、その他の魔法の威力も常識外れな人だそうだ。

どう考えても今の僕では勝てる気がしない。

まあ、戦おうとも思わないが。

それにこの人は今現在どこにいるかがわからない。

以前はトリステインでマンティコア隊隊長をやっていたそうだが、それももう20年以上前の話。

まあ、誰かに殺されるなんて事はまずなさそうな人なので、多分生きてはいるのだろう。

出会わないように注意したいが居場所がわからないので、どこかの町に近づかないというような簡単な対処では対応できない。

取り敢えず出来る対処としては、トリステイン貴族だったらしいので、トリステインにはあまり近寄らないでおこう。

アルセスさんのリーヴス商会も、トリステインにはあまり力を入れていないようなので情報が手に入り難いが、引き続き情報収集をお願いしておいた。

系統魔法の方だが……殆ど変わっていない。

それでも魔力量はかなり増えたのだが、一番得意な水の系統でも、どうしても三つたす事が出来ない。

まあ、系統魔法の使い手としては、水のラインレベルの才能しかないのだろう。

未だに練金も使えないし……

固定化も大して強化されない。

土の才能はないみたいだ。

一番欲しい才能だったのだが……

ない物ねだりして何が変わるわけでもないのに、  
気を取り直して、ガリアの首都リュティスに行こう。

ハルケギニア最大の都市。

色々珍しいものがあるんだろうな。

道中狩や薬草採取をして、懷を暖かくしておかないと。

## 第21話（後書き）

かなり強くなったとは思いますが、ハルケギニア認定チートのあの人には瞬殺されるでしょう。

是非とも強奪で一撃入りたいところですが、レベル9あたりの魔石が出そうですしね。

さて、いよいよガリア。

無事に侵入できるのか？

無事に脱出できるのか？

無能王とその従者には出合いたくない！

出会ったら碌でもない事に巻き込まれそうです。

ケイン君の運命やいかに！

まあ、あおり文句を入れようと思ったのですが、挫折したので適当な事を書いています。

あまり信じないでください。

これから書き始めるので。

## 第22話（前書き）

あれ？

ガリアに行く予定がなんでこんなところに？

勝手に動き始めた指に書いてる本人が一番驚いています。

ガリア編は、もうちょっとあとになりそう。

早く行きたいのに。

## 第22話

### 第22話

目標であったコボルトとの集団戦を終えた僕は直接ガリアには行かず、一度アルセスさんのところによって情報を仕入れた後ガリアに向かう事にした。

ガリアでどれくらいの時間がわからないので、心は逸るが仕方のない事ではある。

少しでもガリアでの行動資金などを手に入れる為、狩や薬草採取をしながらではあるが、ヴィンドボナへ向かう。

この道は既に何度も通った事がある。

3年ばかり修行に明け暮れていたとはいえ、数ヶ月に一回はアルセスさんのところに立ち寄り、何かめばしい情報はないかを聞いているから。

まあ、どちらかというところ、森では手に入らない食料の補充の方がメインではあったが。

ヴィンドボナのリーヴス商会で、道すがら手に入れた毛皮や肉・薬草などを売却した後、アルセスさんのお屋敷に向かった僕は、そのまま奥へと通された。

出迎えてくれたのは書類の山に埋もれているアルセスさん。

「お久しぶりです、アルセスさん……お邪魔でしたか」

「いや、ちょうど休憩を取ろうと思っていただけだからね、構わないさ」

そう言つて執務机を離れると、大きく伸びをするアルセスさん。肩や首からはコキコキと音が聞こえる。

商売は順調に言っているようで、ヴィンドボナに来て3年という短い時間で、既にゲルマニアだけでも大きな町には必ずと言っていい程リーヴス商会のお店が出ているそう。

それを統轄しているのがここヴィンドボナの支店で、アルセスさんはその統括責任者。

短期間でここまで成長したのは、よほど確かな商才を持っているのだろう。

当然ながら各店への指示やハルケギニアの情勢把握、貴族達との付き合いで席の温まる暇もない。

もつとも要領のいい人なので、たまに抜け出してはいるのだが、その度にヒルダさんにお小言をくらっているらしい。

最近ではクラリスちゃんもヒルダさんと一緒にお小言を言っているそうだが、残念な事に僕はまだ見た事はない。

母娘に責められてさぞ意気消沈しているかと思いきや、どうやら怒られて喜んでいるらしい。

別にアブナイ趣味にアルセスさんが目覚めたというわけではない。

ヒルダさんだけに怒られていた時は意気消沈していたらしいが、クラリスちゃんの怒り方がなんとも愛らしいのだそう。

お小言を言っているヒルダさんの横で同じように腰に手をあてて、ほっぺをブクツと可愛らしくふくらませた7歳の女の子。

いかにも私は怒ってますよ、と言いたげなその様子は、本人が真剣であるだけになんとも微笑ましいのだそう。

残念ながら僕は見た事がないが、アルセスさんが嬉しそうに何回も話してくれた。

おかげでその姿を見たいが為に執務室から抜け出した事もあるのだ

とか。

本末転倒な気もするが、当人達はいたって幸せそうだから、それでいいのだろう。

そんなアルセスさんも今日はまじめに仕事をしていたらしい。

ちなみにヒルダさんとクラリスちゃんは、と聞いたら悲しそうな顔でヒルダさんの実家に遊びに行っているとの答えが返ってきた。

仕事の都合がつかなくて一人だけおいてけぼりをくらったらしく、執務室に入った時には落ち込んだまま仕事を必死に片付けていた。これが終われば、後を追いかけるそうだが、予定では戻ってくるのは明後日。

今日中にはとてもではないが終わりそうにないこの書類の山を片付け終わる頃には、おそらくヒルダさん達は既に帰宅の途に就いているだろう。

ご愁傷様と心でつぶやいて、出された紅茶を口にする。

「ところで今日は何の用だい」

お茶うけのビスケットをつまみながら、アルセスさんが問いかけてくる。

「しばらくガリアに行つてこようと思っているので、情報があれば、と思っています」

「ガリアに？それはまたずいぶん急な話だね」

「ええ、ちょっと確認しておきたい事もありますし……」

「そうか……まあ、別に無理に事情を聞き出そうとは思わないけどね。ガリアだったね、ちょっと待ってくれ、確かこの辺に……いや、これではないし……これも違う……どこに置いたっけ……  
ああ、あったあった」

机の上の書類や棚の中やらを引つ？き回して出てきたのは、小さな手帳。

「ガリアの事だったね。あの国は今ちよつと行くにはお勧めしなかな。数年前にオルレアン公シャルルの件があつてからかなり治安も悪くなつてゐる。特にオルレアン公シャルルの領地やオルレアン派の貴族の領地はね。……そういえば、目的地はどこだい？」

「リュティス」

「うーん、どうしても潰されたりなんだりした貴族の領地を通らないといけないか。まあ、ケイン君の事だから森ばかり歩きたいんだろうけど……あまり深くには入らない方がいい。かなり強い魔物も出るという話だからね。あとは……火竜山脈には近付かないようにあそこには火の系統の幻獣が多くいる。その名の通り火竜の繁殖地だしね。まあ、あまり道草しないで行ってきた方がいいよ、道中何があるかわからないからね。盗賊とかも多いし、人攫いも出る。うちで使っている商隊用のガリアの地図を一つあげるし、リーヴス商会リュティス支店への紹介状も書いてあげるから、何かあったらそこに頼つて。その支店長は僕の叔父さんだから」

「すいません、いろいろ迷惑かけて……」

「気にしないでくれ。こつちがやりたくてやっている事なんだから。……ところで今日は泊つていけるのかい？」

「そうですね、お願いできますか？」

「勿論、大歓迎だよ。ヒルダ達がいらないから一人ぼっちでつまらなかったんだ。今日は久しぶりにゆつくりと美味しい酒が飲めそうだから付き合つてくれるよね」

「僕はまだ１１歳なんですけど……」

「気にしない気にしない、君は自分のペースで飲んで私の話を聞いてくれればいいだけだから」

私の話。

つまりはヒルダさんがいかに素敵な女性であるか、クラリスがいかに可愛らしいか。

そんな類の話を延々と聞かされるのである。

正直酒でも飲まなければ聞いていられない。

というより、酒を飲んでも聞いていられない。

特に今日はストッパー役のヒルダさんもないからな、出来るだけ早く酔っ払った方がよさそうだ。

僕は未成年だが、この世界ではワイン程度子供でも飲むので咎められる事はない。

というよりは、水があまり美味しくない。

魔法で取り出した水はまるっきりの純水だから味も素っ気もないし、川の水は上流で洗濯していたりする。

井戸を掘ってみれば場所によっては塩からかったり泥くさかったり。美味しい水というのはなかなか手に入らないのである、街中では。

もともと僕は森暮らしが長かったので、それなりに水に関しては恵まれた生活を送ってきた。

川の水は動物達が水浴びなどで使っているが、湧水がある。

街中のように空気も汚れていないので、水も澄んでいるのだ。

街中には、アルセスさんの家に行くまで長居した事もない。

だから、たいていの場合水筒に入れている分で足りていた。

そういうわけで、僕はワインを飲む機会が殆どなかった。

咎められないのだから好き勝手飲んでも構わないのだろうが、生憎僕はお酒自体が好きではない。

いや、訂正しよう。

お酒を美味しいと思えた事がない。

美味しいと思えない物を金を出して買うような酔狂な人間でもない。当然、1人である時に酒を飲む事はなかった。

酒に慣れていないのだから、当然ながら簡単に酔っぱらう。

ゆっくりちびちび飲んでも、グラスで一杯飲めればいい方だろう。

そして、単なる食事の席ではそれほど飲まなくてもすんでいた。

たいていの場合そこまで飲む前に食事は終わるし、その後の歓談時にはジュースを飲むなりしていたから。

食事時に出してくれないのは、どう考えても嫌がらせのような気がするのだが……

酒に弱いのだからすぐに酔う事は簡単なのだが、できればゆっくりちびちびと飲みたい。

理由は簡単で、一気に飲むと二日酔いがひどいのである。

以前、自分が酒に弱い事を知らなかった時にはひどい目にあった。

アルセスさんの怪我で延び延びになっていたヒルダさんの誕生日パーティー。

出席者はアルセスさん、ヒルダさん、クラリスちゃんとなぜか僕。

家族水入らずの空間を邪魔するような無粋な事はしなくなかったのだ、散々断ったのだが、涙目のクラリスちゃんにお願いされて撃沈した。

そうして誕生パーティーが始まった直後。

皆で乾杯と言ってグラスワインを一杯一気に飲み干したのである。

次に気がついたのは、翌日の夕方だった。

グラスをあおった直後に、そのままの姿勢で後ろに倒れたらしい。

おかげで、パーティーは中止。

クラリスちゃんは僕の目が覚めるまで泣きじゃくっている、と大変な誕生日になってしまった。

勿論目が覚めた後即座にヒルダさんに謝ったのだが、「忘れられない誕生日にしていたきましたわ」と笑われてしまった。ほんとにそう思っていたところ、いつそう恐縮してしまった。もつとも横ではアルセスさんが、こちらはいいものが見れたとばかりに笑っていたのだが。

それからそんな事にならないようにしていたのだが……さすがに妻自慢、娘自慢をエンドレスで聴かされるのは辛い。以前聞いた時には延々明け方まで語り続けてくれましたから。二日酔いの状態で旅立ちか、徹夜状態で旅立ちか。どっちにしろ、碌な未来予想図ではないのだけは確かだ。しかもほぼ確定ときている。

翌日。

二日酔いで痛む頭を押さえながら、僕はアルセスさんの屋敷を後にした。

昨夜の酒の席で話した事は殆ど記憶に残っていない。

まあ、変な目で見られるという事もなく、いつも通りだったので、致命的な発言などはしていないのだろう。

何を言われたかも全く覚えてはいないが。

どうせ惚気話と自慢話だろうから、覚えていなくても問題はないだろう。

それ以外の話をただ単に酒を飲んで騒ぎたい時にするわけもないだろうし。

そういうわけで青い顔で痛む頭を抱えながら、挨拶の言葉もろくにいえず、昨日何か失敗しなかったかどうかを考えている僕は、アルセスさんのしてやったりな笑顔に気づく事もなかったし、荷物が昨夜準備した時より重くなっている事に気づける筈もなかった。

## 第22話（後書き）

そんなわけで、主人公が向かった先は、なぜかヴィンドボナ。

そしてただ単に酒を飲んで二日酔いになっただけの主人公。

どうしてこうなるんだ。

作者の予定と違った道を歩き始めてしまった。  
プロット直さないと……

まあ、数話後にはガリアに行けると思います。

というか、行ってくれないと困る。

本来の予定ではここに来るのはガリアの後だったのに……

まあ愚痴はこれぐらいにしておきましょう。

あまり続けても見苦しいだけです。

注

ただ今この小説は、一身上の都合により検索除外中です。

ただし、更新だけは時間はかかるでしょうし定期的には言えませんがしっかりやっていく予定ですので、そのまま消えるという事だけはいたしません。

いつもは確約はできませんが、検索除外を外すつもりもあります。

ご迷惑をおかけしています。

ちなみに今回のお話、予約投稿で21日0時に設定していたのですが……

ふと見てみたら10月に設定してあった。

危うく一カ月以上あけるところでした。

重ね重ねご迷惑をおかけしております。

開示設定検索除外中にもかかわらず、お気に入り登録してくれる人がいるとは正直思っていませんでした。

久しぶりに小説情報を見てびっくりしました。

というより、検索除外中に見てくださる人がいる事にびっくりしました。

つまらない作者の書いたつまらない作品ですが、読んでくださった皆様に無上の感謝を。

## 第23話（前書き）

お待たせいたしました。

第23話投稿します。

まあ、相も変わらず意味不明なわけですが。

ちなみ、今回で文字数がちょうど66666文字となりました。

そろ目なのは別にいいんですけど、私は悪魔ではないっ！

……ない筈だ……

## 第23話

### 第23話

預かった書状はリーヴス商会ツエルプストー支店宛の物だった。慌てて引き返してツエルプストー辺境伯領に向かう事にする。

最初に確認していれば引き受けたりはしなかったのだが、今更返しにいくわけにもいかない。

二日酔いで頭が痛かった為、つい確認するのを怠ってしまった。出来るだけトリステインに近寄りたくはなかったのだが。今からつき返しに戻るわけにもいかない。

トリステインの地を踏まなければそれほど心配はいらないと思うのだが、油断は禁物である。

まあ、別に狙われているわけでもないから大丈夫だとは思うが。それでも化け物がいると予想される地に近づきたくないのが人情というものだろう。

ツエルプストー辺境伯爵領、か。

代々火の系統の優秀なメイジを輩出している事で知られている。

それほど優秀ならば原作に係わってくるのではないかとという危惧もあるが、少なくともツエルプストー家に僕と同年齢の子供がいるという話は聞いた事がない。

2、3年上の女の子がいるとは聞いた事があるが、同年齢でなければ原作には大して係わらないだろうから問題はないだろう。

この物語が、学園物だと仮定したとしても、2、3年上なら、留年でもない限り同学年になる事は難しいだろうし。

もしくは、主人公に係わるメイジがよっぽど優秀で、飛び級を……あれ？

そう言えば、魔法学校と士官学校があるとは聞いていたけど、もつと幼い子供向けの学校なんて聞いた事ないな。

まあ、基本学校なんて貴族のいくものだから、幼い頃はみんな家庭教師でもつけているのだろう。

実際、旅の途中で盗み見た貴族の坊ちゃんも家庭教師をつけられていたし。

幼年期の学校がないのなら、飛び級なんてあるわけないだろうから、まあ大丈夫だろう。

多少の不安はあるが、まず問題はないと判断する。

そもそも学園物かどうかともわからないし、貴族の横のつながりなんでものは複雑すぎる。

さすがにそこまでいちいち気にしていたら、町で貴族を見かける度に、この人は物語と関わり合いがあるのかどうかを考えなくてはいけなくなってしまう。

いくらなんでもそこまで考えてはいられない。

取り敢えずは同年代の子との接触をしないよう注意しておけばまず大丈夫だ、と思いたい。

ツエルプストー辺境伯領は、その見事な統治でも知られている。

なにしろトリステインとの国境を接して睨み合っているのは、トリステイン最大の貴族ヴァリエール家なのだ。

些細な事でよく争いを起こす両家だが、それだけに兵の練度は高い。実際争いの種というのは聞いた事のある限り、愚にもつかない恋のさや当ての様なものから発展していつているものが多いが、両国を巻き込んだ戦いになる事も決して少なくはない。

それでも一歩も引かずに張り合っているのは、やはり領民を良く治めている事の証なのだろう。

少なくとも領民に愛想をつかされるような政治は行っていないようだ。

通常、それほど争いの多いと地からは平民は逃げ出すものだ。

そうなれば国力は低下し、いずれは二度と立ち上がれぬほどの打撃を受けて滅びる事になる。

火のメイジの家系という事から、最初に話を聞いた時には戦争ばかりに特化していると想像していたが、実際に見たツエルプストー領は治安も良く、平民もそれなりに幸せそうだった。

ヴィンドボナとそう大して変わらない、いや、街中の清潔感に関してはこちらの方が上だろう。

さすがに街の規模はヴィンドボナほど大きくはなかったが、それでも人口2、3万はあるだろう。

なかなかの賑わいをみせている。

これからは街に入る時に一タインビジブルで姿を隠して潜り込む必要はない。

アルセスさんから貰った身分証明があるから。

ガリアに行こうと決めた時にはこっそり潜り込んで、目的を果たしたら抜け出そうと思っていたので、正直ありがたい。

僕がずつと森の中を歩いていくつもりだと知ったアルセスさんが、リユティス支店への紹介状と一緒に用意してくれたのだ。

まあ、二日酔いの頭で受け取ったから、全然気がつかずに森から国境越えをしようとしていたのだが。

さて、早いとこ用事を済ませてこの街を出ないとな。

リーヴス商会ツエルプストー支店。

つい最近できたばかりの支店である。

ツエルプストー辺境伯の強い要望によってできたものだが、リーヴス商会としてはそれほど乗り気ではなかった。

確かに治安もいいし人口も多い。

だがそれは平時の事。

ひとたび戦争になればそんな束の間の平和は消し飛ぶ。

そして、先程言ったようにツエルプストー・ヴァリエール両家の争いが両国間の戦争になった例は多い。

というよりも、両国間の戦争の理由の八割はそこにある。

両家の争いは、代が変わる度に行われる恒例行事みたいなものだ。

代が替わるというより、子供が成人する度に起こるような物だから、2、30年に一回は起きる計算になる。

やってる事は本当に貴族がする事かと言いたくなるような横恋慕や略奪愛。

ツエルプストー家はヴァリエール家に何か恨みでもあるのだろうか？

というか、この両家を転封してしまえば済む事だと思うのだが。

昔の日本みたく鉢植政策でも何でもできるだろう。

本当に戦争したくないならば。

ひよっとしたらいいガス抜きだと思っているのだろうか？

トリスティンから見れば、ゲルマニアは伝統もない、始祖の血を持たない野蛮国。

ゲルマニアから見れば、トリスティンは伝統にしがみつくしかできない、頭の固い未開発国。

ゲルマニアの方がはるかに優れていると、僕なんかは思うんだけど

ね。

トリスティンの言い分って負け犬の僻みみたいなものだし。国力で大差つけられているから、それしか誇れないって悲しいよね。

まあ、そんな事はどうでもいい。

とつとと用件済ませてガリアに行こう。

「いらっしやい」

店に入った僕を出迎えてくれたのは、50代だろう恰幅のいいおじさん。

「すみません。ここの責任者ってどなたですか？：

「ああ、旦那に用事かい。ちょっと待ってな、今案内の者つけるから」

どうやらこのおじさん、責任者ではなかったようだ。

「すみません、お願いします」

「ところで、旦那に坊主がなんの用事だい？」

「ちよつとヴィンドボナの支店の方から頼まれてまして」

「へえ、本店からかい。ご苦労だったね。おい、ミーシャ、この坊ちゃんを旦那のところに案内してやりな」

呼ばれてこちらに来たのは20代前半と思われる女性。

とりたてて美人というわけではないが、清潔感漂う女性だ。

もつとも、受ける印象としては、元気がいいというよりイキがいいと言った方が正しいだろう。

「なんだい、父さん。この坊やを旦那のところに連れてけばいいのか

い？」

「ああ。それと坊やはやめとけ。そんななりでも、ヴィンドボナ支店からの使いだ」

「へえ、こんな小さい子がねえ。まあ、いいや。こっちだよ、ついで」

一応僕も身長160？はあるんだけど、このお姉さんやたらと背が高い。

頭一つ分違う。

「そちらのお客さんはいいんですか？」

「ああ、いいいいいよ、気にしないで。お得意さんだしね。こっちだよ、ついてきな」

そう言つて、一言赤い髪の子とその傍の20歳ほどの女性に声をかけると僕の前に立って歩き出した。

女の子は何やらアクセサリを選んでるようで、目つきがえらく真剣だ。

声を掛けられても、気を向ける事すらない。

代わりにだろうか、傍にいる女性がお姉さんに軽く頷いていた。

## 第23話（後書き）

ところで皆さんにお聞きいたします。

現在2本同時投稿という荒行をやらかしている作者なのですが、投稿タイミングについて意見を頂けないでしょうか？

1 ・こちらメインで、もう一本はストックがたまったら投稿。

2 ・あちらメインで、こちらはストックがたまったら投稿。

3 ・交互に投稿。（間隔については明言できません）

4 ・その他。

5 ・つまんねえからやめろ。

こちらの方は、妄想爆発しようがなにしようが、週に一本書ければいいなあという執筆スピードです。

あちらは、妄想爆発したら、かなりのスピードで書けます。（元々が息抜き用なので、あまり考えてないので）

以上、よろしければお答えください。

交互にという意見と、一本先に片づけちまえという意見が出ております。

リアルな友人からはやめろという意見もあるのですが……

検索除外から復帰いたしました。

ご迷惑をおかけした事を、この場を借りてお詫び申し上げます。

検索除外中にもかかわらず、なぜかお気に入り登録数が30ばかり増えていた……

おそらくお気に入り登録公開していた方のページから飛んでこられたでしょう。

他の方法もあるかもしれませんが、私は知りませんが。

感想を送った方なら感想ページから飛べるそうですが。

すべての読んでくださった方に無上の感謝を。

## 第24話（前書き）

二か月以上も開けて申し訳ありません。

散々待たせた末に出来上がったのは……

本当に申し訳ありませんという出来です。

精進します……

## 第24話

### 第24話

「ところで少年、名前はなんてえんだい？」

「ケイですけど、何か？」

「いやね、坊やって呼んだら怒られちまったし、少年って呼ぶのもなんか違和感あるしね。それにしてもケイは背え低いねえ、あたしと頭一つ違っじゃないか。そんなに小さくっちゃ可愛い女の子にもてないよ」

余計なお世話である。

本当に接客業に就いている人なのだろうか？

元気のいい物言いはともかく、人の事をちびだのなんだのと言いたい放題である。

これでは客が怒って帰らない方が珍しいのではないだろうか。

というよりも、貴族に向かってこんな口のきき方をしたらその場で殺されても文句は言えないだろう。

他人事ながら心配してしまうが、今まで殺されずに生きているんだから大して問題とはならなかった、のではなく貴族相手にはちゃんとした口をきいているんだろう、と勝手に結論を出した。

入って日が浅く、貴族の応対をした事がないという可能性もあるだろうが。

そんな会話を交わしながら、店の奥の扉を開けてずんずんと中に入っていくミーシャさん。

通路自体はそれなりの広さがあるのだが、両側に商品の入った木箱

が山積みになっっているので並んで歩けるだけの余裕はない。

「なんでこんなところに山積みしてるんですか？在庫なら倉庫に入れといった方がいいと思いますけど」

ふと疑問に思ったので、そのまま口に出して訊いてみる。

「んー、こっちの方がとりやすいからねえ。どうせ客がこんな奥に入ってくる事はないんだし」

「じゃあ、商談で人が来た時はどうするんですか？」

「商談の時には応接室使うから大丈夫じゃない？まあ、貴族様相手の場合呼び出される事の方が多いんだろうけど」

まあ、確かにそれもそうか。

火事になったら困るような気もするが、文句をつける筋合いもないので黙っておいた。

「ところでケイ。彼女はいるのかい？」

とりあえず聞く事もなくなったので黙っていたら、何を考えたかいきなり変な事を聞いてきた。

「別にいませんけど？」

というか、この世界に来てから付き合いのある人自体が殆どいない。アルセスさん一家とその屋敷に仕えている人達の他は……毛皮屋や肉屋のおっちゃんくらい？

知り合いというだけで付き合いというほどの関係でもない。

強いて挙げれば商売上の付き合いという言い方もできるだろう、程度なものだ。

考えてみるとこの世界での知り合いなんて本当にごくわずかしかない。

元々原作に介入しないようにと思って、出来るだけ人付き合いをしないようにしているのだが、傍から見ると、物語に出てくる人間関係を嫌って一人孤独に山奥で暮らし、用事のある時だけ麓の村まで出てくる世捨て人かなんかと大差ないだろう。

いや、そういう人はたいてい老人だから、老人ぶった奇妙な子供？

物語に介入したいとは思わないが、世捨て人となろうと思っているわけでもないので、正直現在の状況に不満がないわけではない。だからと言って大っぴらに行動するにはまだ早すぎる。

せめて物語が始まるまでは、人付き合いなども出来るだけ避けた方がいいと考えている。

本当に貴族なんてどこでどうつながっているかわからないのだから、少なくとも貴族に縁のありそうなところは避けておきたい。

少なくとも同年齢の貴族がいるような所には近付きたくないのが本音だ。

取り敢えずの対処法が同年齢の子供とはなるべく付き合わないようにする、という極めて消極的な方法しかない。

もつとも平民メイジの子供の場合杖やマントを常に身につけているとは限らないので、そうなるとお手上げという事になるが。

まあ、ゲルマニア内だけで考えるならば、それほど気にする事はないだろう。

メイジの力は血によって受け継がれる。

実際、殆どの貴族は得意とする系統がどの生まれかによって大体わかってしまう。

ツエルプストーといえば火系統、と誰もが連想するように。

であるならば、虚無というのはブリミルの血を引いた家系にしか発現しない筈。

そしてブリミルの血をひいていると言われているのは、ガリア、アルビオン、トリステインの王家。

まあ、実際には王家も傍系だのなんだのと色々あるだろうから、王家のみとは言えないがそれでも警戒すべき範囲は大分狭める事が出来る。

もつとも御落胤とか隠し子なんてものがある可能性なんていくらでもあるのだが、正直そこまで気にしていたら身動きが取れなくなってしまう。

ブリミルの血をひいている貴族は少なくともゲルマニアにはいない。少なくとも公にされている情報ではそうになっているし、隠す事によって生じるメリットも思いつかないのでおそらくは信じてもいいのだろう。

残りの一国、ロマリアはどうなんだろう。

確かに始祖関連だけど、建国したのはブリミルの子供じゃなくて弟子なんだよな。

ブリミルの血をひいていないところに虚無がいる筈はないと思うのだけど、婚姻の結果多少なりとも三王家からの血が入っている事は十分考えられるし……

まあ、取り敢えず判断は保留にしておこう。  
何も急いで今判断する必要はないのだから。

ドンッ

「いてっ！」

考え事をしながら歩いていたら何かにぶつかってしりもちをついてしまった。

前を見ると、そこには不機嫌そうにこちらを見下ろしてくるミーシヤさんの顔。

やばい、考え事に夢中になりすぎて、話しながら歩いていた事をすっかり忘れていた。

「ケイ、あんた人の話聞してるかい？ 話しかけてるのにぼーっと考えこんだりして。ひょっとしたら意中の子の事でも考えてたのかい？」

今まで考え込んでいた事がどういったわけかはわからないが、ミーシヤさんの中でもとんでもない誤解を生んだらしい。

「さつきは彼女なんていないと言ってたけど実際はいるんじゃない。それともまだいい友達ってやつかい？ 駄目だよ、決める時にさっさと決めないと。横から出てきたどこの誰とも知れない男にかっさわれちまうよ。そうなってから後悔したって遅いんだからね。」

僕の沈黙をどう判断したのか、1人で勝手に盛り上がっていくミーシヤさん。

彼女の頭の中で、僕は好きな子がいるのに告白できない臆病者として認定されてしまったようだ。

正直どうでもいい話である。

ただ単に威勢のいいお姉さんだと思っていたが、その認識は誤りだったようだ。

やはり女性というものはその性格にかかわらず噂話が好きなのだろう。

僕が見ている間にも妄想がどんどん広がっていく。

どんなシチュエーションで告白をするかとか、その時にプレゼントする物はどんな物がいいかとか、よかつたら見繕ってあげようとか、告白時の服装などの身だしなみについてなどを僕の反応を全く気にせず機関銃のように喋りまくるその姿は正直怖かった。

もっともプレゼントについてはこのお店で見繕おうと考えていたようなので、妄想暴走状態でも商売だけは忘れない事には感心はしたのだが。

ところで、いい加減に店長のところまで連れて行ってくれないだろうか。

さすがに通路の真ん中に仁王立ちしたまま、一步も動かずに妄想話を延々と聞かされるのは辛いものがある。

放っておいて一人で店長のいる部屋を探そうにも、通路の真ん中で頑張っているせいですり抜ける隙間がない。

どうしようかと途方に暮れていたら、ミーシャさんの後ろの方から人が来る気配があつた。

## 第24話（後書き）

そんなこんなで一話かけてまだ店長に会えない……

というよりミーシャさんの暴走で話が潰れてしまいました。

あれ？　なんでこうなった……

冬の更新速度には多大な期待はしないでくれるとありがたいです。

何しろインターネット回線のある部屋にはストーブがないので……

今回は今回ほどはお待たせする事のないよう頑張ります。

## 閑話（前書き）

主人公以外の視点でのお話です。

## 閑話

閑話 アルセスさんの場合

僕の命の小さな恩人、ケイン・ブリッグス君は奇妙な子である。

妻の誕生日プレゼントを買いに行った僕は、メイジに難癖をつけられた瀕死の重傷を負う事になった。

娘の泣き声をどこか遠くに感じながら、痛みと呼ぶのも生ぬるい全身を襲う激痛に耐えきれず、僕は意識を失った。

おそらく助けてくれる人はいない。

そんな事は遠のく意識の片隅でもはっきりとわかっていた。万が一の時を考えて常に周りに護衛をつけていたが、今日はそれもつけていない。

妻の誕生日プレゼントを買うという計画の為にわざわざ護衛を遠ざけたのだから。

帰りの時間は言っているが、それも意味がないだろう。

帰宅予定時間になる頃には既に僕は冷たくなっている筈だから。

この街に来てまだ日も浅い僕達が知っている人といえば、このようなどころに来る筈もない人達ばかり。

そして、よほどの知り合いでない限りメイジにやられた平民を介抱してくれる平民もいない。

当たり前の事だ、彼らだって自分が生きていくのが精いっぱい。

今にも死にそうな人間を見つけたからといって、いちいち気にかけている余裕なんかはない。

第一、貴族に睨まれるような真似を進んでしたい者がいるわけがな

いのだから。

気を失った僕はそのまま死ぬ筈だった。

よほどの偶然がない限り、それは変わる事のない事実。

僕の行動を“物見の水晶”で見ている人からの救助も間に合うわけがない。

彼らがいるのはここからはるか遠くのアルビオンなのだから。

目を覚ましたのはどこかの安宿、寝心地など考慮されていないだろうと思える程にかたいベッドの上。

年代物……のシーツのすえた臭いが鼻につく。

正直わけがわからなかった。

どう考えてもあの状況から助かる可能性は無きに等しかったのだから。

上げそうになった声を無理やりに飲み込み、状況の把握に努める。

寝ているのは、おそらくはベッドの上。

もっともこれほど寝心地の悪いベッドなどお目にかかった事もないが。

シーツの鼻につくすえた臭いからして、僕の知り合いに助けられたという可能性はない。

この国にはまだ来たばかりで知り合いは少ないが、それでも知り合った人達はみな貴族、もしくは大商人と呼ばれている者ばかり。間違ってもこのような家具を使うような身分の持ち主ではない。

ならば、通りすがりの人？

それこそまさかだろう。  
が、他に考えようもない。

腹の減り具合からして長く伏せていたわけではないだろう。  
おそらく、あれから一日と経っていないと思われる。

だが、この身体の痛みは？

確かに体はまだ痛むし満足に動かす事も出来ないが、治療をしつかりと施されているのがわかる。

自分の体だ、怪我の具合は良くわかつている。

どう考えても一晩寝てよくなるような怪我ではなかった。  
むしろあのまま死んでないこの状況こそが異常だ。

ベッドの周りには人の気配が一つ。

気づかれぬように周囲の気配を確認したが、他にあるのは寝息が一つだけ。

意識を取り戻した事がばれぬようにうつすらと目を開けて周囲を確認したが、目に入るのは薄汚れたボロボロの天井。

そして薄眼に見えたのは10歳そこそこの少年一人。

身なりは何処にでもいるような普通の平民の子供。

どこから見ても決して金を持っているような人間には見えない。  
間違っても僕の治療費を出せるわけがない。

第一出す理由すらない。

ならばここに連れてきて治療してくれたのは別の人なのだろうか？

それもなかなか考え難い状況ではある。

自慢ではないが、僕の体はぼろぼろでいつ死んでもおかしくはなかった筈。

わざわざ見知らぬ人間を助けるような人物が、瀕死の人間をほっばり出してどこかにいくだろうか？

考えられる可能性としては、この少年の親が治癒に長けた平民メイジという事ぐらいだが、少年の身なりから考えて裕福とは言えない生活だろう。

僕の服装は平民にしては多少良い物を着ているといった程度。

それほど金を持っていそうな身なりはしていなかった。

あまり目立たないように、わざわざそのような服に着替えたのだから。

生活に苦勞している人間が、なんの謝礼も考えずに人助けなどする事はない。

平民メイジとはいえ、一回の治療にとる金額は最低でも10エキユ

I。  
とてもではないが平民が気軽に治療を頼める金額ではないのだ。

その治療費の高さ故に、医療専門の平民メイジを使う人間は限られている。

まず普通の平民がおいそれと払える金額ではない。

治療費用が基本料金で済むという事はまずあり得ないからだ。

平民はよほどの事がない限り魔法治療を受けようとはしない。

その為、メイジに頼ろうとした時点で既に重態になっている事が多く、当然ながら呪文だけではなく魔法薬などが必要になる。

そして基本治療費の10エキユに魔法薬などの値段は入っていない。

つまり、よほどの事がない限り最低数10エキユはかかるのだ。

貴族は勿論平民メイジなど使うわけがない。

貴族には貴族同士の横の繋がり、縦の繋がりというものが存在する。まず第一に頼るのはお抱えのメイジ。

それでだめなら知り合いの水メイジ。

それでもだめなら伝手を頼って高名な水メイジを頼む事になる。

平民メイジを使う、などという選択肢は初めから存在していないのだ。

第一、貴族が頼りにする程腕のいいメイジなら、とうの昔に家臣の誰かに養子縁組させるなどして取り込んでいる。

それがなされてないという事自体が、平民メイジが凡庸な力しか持っていない事の証明となる。

大商人もバツクには貴族がいるので、通常はそちらを頼る。

確かに多少治療費は高くつくだろうが、どのみち上納金や賄賂などで取り上げられる金なのだし、関係強化の意味合いもあるので、平民メイジを頼るという選択はしない。

つまり、平民メイジの治療を受ける事が出来るのはそれ以外の階層普通の平民よりはお金を持っているが、貴族との付き合いがない者達である。

そして彼らにしたところで、そうやすやすと頼める金額でもない。

普通の平民よりはお金に余裕があるので早めに治療を決断できるだけである。

つまり、平民の医療メイジはそこまで需要があるわけではないのである。

だからこそ、彼らの治療費は年々上がる一方だし、専門職としては成立しにくいのである。

無償で？

それこそあり得ない。

そう簡単に仕事の依頼がない以上、彼らの生活は平民とそう変わるものではない。

日々の生活に困っている人間が、見知らぬ誰かを無償で助ける？  
笑い話にもなりはしない。

たまにどこぞの貴族のお坊ちゃんやお嬢ちゃんが自領の街の人々の治療をしているという噂を聞く事はあるが、それも平民の為にやるわけではなく、単なる実践の場を求めている話であるし、そんな酔狂な貴族は滅多にいない。

だからこそ噂になるのである。

では、此処ウィンドボナでは？

ここの領主は当然ながら皇帝家。

間違っても皇太子や皇女が街中で治療行為などをする事はない。

名声を得たい貴族にしても、平民の治療などという愚策をとる筈がない。

基本的に貴族は平民を奴隷のように見ているのだから。

それは、爵位を金で買う事のできるゲルマニアといえど他国とさして変わらない。

奴隷にいちいち治療を施すなど、慈悲深いというより物好きの範疇に入る行為なのだから。

平民メイジにしたところで、貴族と喧嘩した人間を治すなど火中の栗を拾うようなものだ。

名声を得たいにしてもこのような患者を選ぶわけがない。

貴族に恨まれる可能性の方が高いのだから、当然の事ではあるが。

さて、そうなるに僕の治療をしてくれた人はどのような人物なのだろう？

貴族でも平民メイジでもない、というのは怪我の状況から見てさすがにありえないだろうから、よっぽど変り者のメイジに運良く当たったとは思えない。

まずはこの少年から話を聞いてみる事にしよう。

## 閑話（後書き）

あれ？一話で話が終わらない……

ま、まあ、アルセスさんもいろいろ考えているという事で、  
気絶してるのに考えてるのかとかはスルーしてください。

つか、もうちょっと話をコンパクトにまとめないと……

会話も何もないし……

## 閑話2（前書き）

今更ではありますが、皆さん大丈夫でしたか？  
作者は国外追放中なので無駄に元気です。

いえ、仕事の疲れなんて、被災地の人と比べられるようなもんじゃありませんよ。

コホンッ、そんなわけで。

長らくお待たせいたしました。

リアルの方が忙しいのでなかなか更新ができませんが、何とか頑張  
って書きあげてみました。

## 閑話 2

閑話 アルセスさんの場合 2

少年、ケイ君と話して驚いた。

助けてくれたのは彼だというのだ。

どこからどう見ても平凡そうな普通の少年。

貴族どころか、平民メイジにさえも見えない。

だが、彼はおそらく、いや、間違いなくメイジだろう。

あまり自分の事について語りたくないようなので、詳しくは訊かなかったが、どう考えても魔法で治療したとしか思えないこの状況、彼が一人で旅をしているという事実、僕に杖を見せないという奇妙な態度。

彼は明らかに普通のメイジではない。

能力的にはさして優秀なメイジとも思えないが、それは大人と比べるの事。

この年で既に系統魔法に目覚めているというだけでも十分優秀と言えるだろう。

そして何より彼が異質だと思えるのは、その在り様。

おそらく彼はメイジという者がどのような者かをよく理解していない。

いや、それ以前に社会常識すらあまりよく理解していないだろう。

僕もこれまで多くの人と会ってきた。

商売上の付き合いから貴族などと接触する事も多く、メイジという

者がどの様な者かはよく知っている。

貴族、メイジという者を知らなければ、商売なんて上手くいく筈もないのだから。

商人にとつては基本知識である。

それは行商人の様な、店を持たない商人ですらも知っている事。

貴族、メイジという者は基本的に魔法を使えない者を見下している。それはどの国の貴族が、という事ではない。

程度の差はあるにせよ、全ての貴族がそうなのである。

ゲルマニアでは金で爵位が買えるが、そうして貴族となった者も。

貴族の地位を失い、平民メイジとなった者も。

基本的には権力を持たない平民を見下している。

違ふのはどの程度見下しているかだけ、と言つても過言ではない。

元々平民だっただけに、金を積んで貴族になった事で横暴になる者も多く、人によっては元々貴族だった者より反感を買っている者もいる。

ごく稀にそうでない者もいる事はいるが、八割方はそうである。

金を積んで爵位を買い、領地を授かっている以上、当然の事ながらその領地を治めるといふ義務が発生する。

そして、そんな事はまったくの素人に出来る事ではないのだ。

商人が商会を運営するのと、貴族が領地を経営するのは仕事の内容において全くの別物である。

領地経営のイロハも知らない者に簡単にできる仕事ではない。

それでも無理に経営しようとするれば、大抵は手痛いしっぺ返しをくらう。

金を積んだという事は、まず出費が先にきている。

そして、貴族の収入という者は基本的に治める土地からの税金である。

つまり、そこから儲けようとすれば、税金を重くせざるを得ない。

そして、どれだけの税金がとれるかという見極めが、昨日今日領主になったばかりの人間に出来る事ではないのは自明の理である。

大抵の場合は領民の限界を超えた税金を課する事になるのだ。

当然領民からは反発があり、そう簡単には元手すら取り返せない。

先に述べた八割方はここで脱落する事になるし、残りの二割のうち幾らかもここで間引かれる事になる。

ゲルマニアは確かに爵位を金で買えるが、そうして貴族となった者の定着率は極めて低い。

御家お取り潰しがハルケギニアで一番多い事実がそれを証明している。

又、そうでもなければ売りに出される爵位がそうそうあるわけがない。

中には頭のいい者もいて、領地経営に関しては元貴族の使用人を雇って丸投げにする者もいる。

もつともこれは雇った使用人を管理できなければ意味はないし、その使用人の当たり外れに左右される。

第一、このやり方では、結局何年経っても領地経営のノウハウが身につくわけではない。

残った二割以下の大部分もここで退場となる。

そしてもつと頭のいい者は、有力貴族・大貴族の庇護下に入り、領地経営を代行してもらい、わずかばかりの収入を得る。

領地経営で儲けようと思っていけないからできる事である。

大抵の者はそこまで割り切る事は出来ない。

投資をして利益を回収しないと云っているも同じなのだから、商売人がそう簡単に取れる手段ではない。

最低数万エキューをどぶに捨てる覚悟がなければ取れない方法なのだから。

体力のない商人には絶対に取れない方法だ。

そうして、ごく一部の者は成功し、新たな貴族の列に加わる事になる。

ちなみに、彼らはそのまま丸投げして終わり、という方法はとらない。

領地から得られるわずかばかりの収入では、いつまで経っても赤字が埋まらないのだから当然である。

元商人の彼らは、損をするという事をひどく嫌う。

そして、それを補填する為の方法を考える頭を持っている。

そんな彼らが獲る手段というのは、息子や娘を大貴族から派遣されてきた代官の下で勉強させる事である。

自分の代では単なるお飾りである事を許容できるからこそ取れる手段。

それでも貴族であるという名はあるので、商売上での優遇措置という実は受けられる。

もつとも大して身がついているわけではないが。

貴族になりたがる金持ちは多いが、貴族を続けられる金持ちはそうはいない。

成功する為には欲を捨てなければならぬのだから。

けっして平民に優しくないこのハルケギニアで、商売を続ける事は容易な事ではない。

そんな中で金持ちになるというのは、本人の頑張りや運など様々な

要素が味方してくれなければ出来ない偉業である。

己の人生を懸けて築いた財をどぶに捨てる事のできる人間なんてそうはいないのだ。

この投資は確実に儲かるというわけでは決してないのだから。

僕の家は、アルビオンでリーヴスという名を使って商売をしている。僕の名前のアルセス・リーヴスもアルセスは名前だが、リーヴスは商会名だ。

貴族でない者は家名を持ってない。

それは何処の国でも変わる事のない事実。

ただ、これには抜け道というものも存在する。

家名でなければ構わない。

つまりは商会名という事ならば問題はない。

まあ、商会名を名乗りに入れられるようになるにはそれなりの規模の商会でなければ不可能だし、お偉方への付け届け（つまりは賄賂、献上金というものであるが）という義務も発生するのだけだ。

実力のない商会では資格を取得する事すら出来ない。

実力があっても自国のみで商売をやっているところもダメ。

国としても、商会名を名乗らせる以上、その国を代表する商会の一つとして他国から見られる事になるのだから当然の話である。

その国を代表する商会が他国では全くの無名なんて、見栄で生きている様な王族や貴族に耐えられるものではない。

というように、他にも色々な申請基準というものは存在するが、我が家のリーヴス商会もゲルマニア進出に伴い商会名を名乗る事を許されるようになった。

ロマリア、ガリア、トリスティン。

この三国には既に進出済みで、残るはゲルマニアだけだったのだから当然と言えば当然の事ではある。

話がそれってしまったが、ケイ君はどう見ても貴族としての常識を持つていない。

いや、メイジとしての常識すらないだろう。

いや、その程度の問題ではない。

僕のような貴族でもメイジでもない者にすらすぐにわかるその在り様。

彼は、ハルケギニアで暮らすにあたって当然知っているべき一般常識がわかっていない。

彼と会話して受けた感触からして、おそらく知識はあるのだろう。かなり頭のいい子だという事は理解できる。

だが、この年になるまでに当然身についているべき常識の実践が出来ていない。

これは異常な事である。

この年まで一人で生きられるほどハルケギニアは甘くはない。

当然の事ながら彼を育てた者がいる筈だ。

それがどういう人物かはわからないが。

たとえ、隠遁したメイジだったとしても（彼がメイジである事が間違いない以上、そしてこの年で1人旅ができるだけの實力を持つて

いる以上、最低でも彼を育てた人物はメイジであろう。そうでなければ辻褄<sup>つじつま</sup>が合わない)、一般常識を教えないという事はあり得ないし、そもそも一緒に暮していればそれなりの常識は身に染みついている筈なのだ。

実際彼は知識としては持っているのだから、何も教えられていないという可能性はこの時点であり得ない。

今の彼から受ける印象は……

知識だけはあるが、それを実体験として実践するには至っていない。その為か、行動の端々に違和感を滲ませる、そんな少年。

没落貴族？

そんなわけがない。

平民メイジ？

そんなわけがない。

ならば何なのだと聞かれても答えにつまってしまうが。

どのような環境で過ごせば、こつ<sup>くつ</sup>も歪<sup>こま</sup>な少年が出来上がるのか。

命の恩人である彼に感謝の念を覚えるとともに、ほんの少しの、そして名状しがたい恐怖感が心の奥底に芽生えていた事に、この時の僕は気づいていなかった。

## 閑話2（後書き）

うーん。

なんか最初のプロットからかけ離れていつてしまっているのは何ででしょう？

このままいくと原作開始前にゲームオーバーになりかねん……

取り敢えず次回は本編に戻る予定です。

どうかで矯正入れないと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7416m/>

---

傍観する救世主

2011年3月28日14時46分発行